

42637

教科書文庫

4
810
51-1938
200030 1911

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

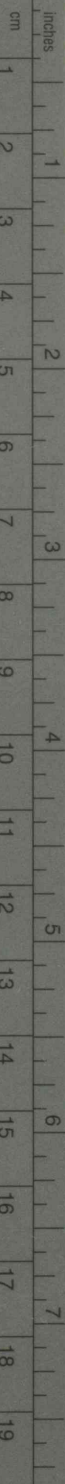


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
Y019
資料室

師範國文

第一部用 卷十



資料室

395.9
Y019

文部省檢定濟

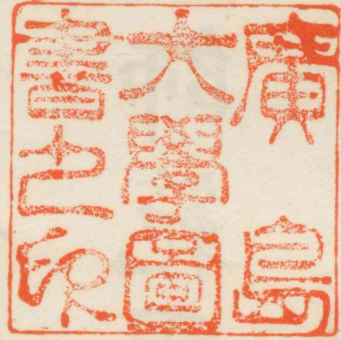
昭和三十三年三月十五日 師範學校國語漢文教科用

吉田彌平編
石井庄司補訂

師範國文 第一部用 卷十

修正版

東京 光風館藏版



師範國文 第一部用 卷十

目次

一	我が國體	西	晋一郎	一
二	寧樂の句	(萬)	葉集	二六
三	歌の調子	島	木赤彦	三五
四	古事記を讀みて	相	馬御風	三三
五	天石屋戸	(古)	事記	四四
六	忍坂の大室屋			五三
七	上古の詩歌	藤	岡作太郎	五五
八	大丈夫の覺悟	幸	田露伴	五五

目次

一

九	國語の愛護	五十嵐 力七
一〇	教育的思慕	小西重直 七
	國文學史	六
	序説	六
一	上古の文學	八九
二	平安時代の文學	九四
三	鎌倉室町時代の文學	一〇六
四	江戸時代の文學	一二七
五	明治時代の文學	一三三
六	大正時代の文學	一四〇
七	現代の文學	一四六
	目次終	

師範國文 第一部用 卷十



西晉一郎
哲學者
文學博士
廣島文理科大學
教授

一 我が國體

西晉一郎

我が國の成形の傳説として傳はつてゐる史實は何であるかといへば、國土民人の成生と共にそれを統一すべく定められた主が生まれ出で給うたといふこと、而して國土と民人とその主とは同じ神から出たもの、即ち同胞一體のものとせられて居ること、これその根本的なるものである。國土と民人とその主との一體といふことは、あらゆる國家が何等かの形に於て實にせねばならぬところで、さもなくば國家をなさぬ。この一體を

たゞ法的組織によつてのみ實にするものは、その統一が外面的たるに止る。我が神代史の語るところに據れば、この統一は民族的大家族としての内面的一體である。即ちその統一の根柢に、尊敬と親愛とを一にする特殊の情がある。皇室の御祖たる天照大神に對する八百萬の神即ち我が民人の祖先の崇拜尊敬は絶対的といふべきもので、この國土神々の主として生まれ出で、しかも國土神々とその親を同じくするのであるから、後の世の所謂君臣父子の關係を一にせる、他に比類なき間柄である。我が太古傳説は、かくして國土の開闢、蒼生の創生を語ると同時に、國家の成形を語り、しかもその國家は一種無類の内面的結合を根柢とする。我が民族にとつては、國土民人の自然的發生の過程がそのまま、建國の業に進み行き、その建てられた國の體と

天壤無窮の神勅
豐葦原の千五百
秋の瑞穂國は是
吾が子孫の王た
るべき地なり爾
皇孫就いてしら
せさきくませ寶
祚の隆えまさん
こと當に天壤と
窮りなかるべし
(日本書紀)

する所は直ちに天壤無窮の神勅として掲げられて居る。この神勅は過去つた昔の言葉でなく、幾多の變遷起伏を経て來た我が歴史を一貫して、我が國をして我が國たらしめて居る活きた民族精神の言葉である。國史は我が國の制度が氏族制度、郡縣制度、封建制度、立憲制度として移り來つたことを語つて居るが、これら制度の變遷のいづれにも内在しつゝある、しかも超在不易終始一なるものとして萬世一系の天皇を奉戴しつゝある。この奉戴によつて氏族的國家も建てられ、この奉戴によつて郡縣制度への改新も行はれ、この奉戴によつて武臣の封建制度も始めて實現することが出來、この奉戴によつて立憲制度の欽定も見られたのである。而してこれらの革新は、いつも前制度が漸く國家的統一の弛緩を來さうとする際、我が不變不動の根本

的統一力が自己を振り起して、古くして常に新なるものを新にしたのに外ならぬ。

この根本的統一力は至つて單純である、又さやうに單純であればこそ、よく根本統一の力をもつのである。即ち國民の天皇に對し奉る絶對的崇敬親愛の情である。この至純の情が我が國の根幹であり、我が國を我が國として活かす生命である。この情は我が歴史を造り、我が歴史に養はれ、一難に遭ふ毎に益、自己を強くし來つた。東海の上に出現したこの國土は、その民人とその主と共に、同一の神から出現した太古ながらの家族的の國である。將來いかやうに發展しようとも、この渾一的國家的生命の發展でなければならぬ。國の盛といふは必ずしも國疆の擴張を指さない。富國強兵は必ずしも國の大を語らない。た

だ民族の精神が充實徹底し、國土民人の隅々までも遍滿して、寸分の間隙だになきこそ眞に國の盛大である。人に不磨の本心があつて、曇りがちである人心ながら、全く禽獸に墮在せずして人間的生活をなすが如く、國にその國の本心即ち民族精神があつて、その明暗常ならざる歴史的變遷の裡にも、その國のその國たる所を保持する、これ即ちその國體である。氏族權臣、武士の代るゝの專横跋扈は國史を汚し、時には國の體たる果して何であるかを疑はしめることがあり、外來の教説の流行、異國文化の心酔は、時に或は民族精神を曇らすものがあつても、それらは謂はば表面的浮沈に過ぎないで、國民の心の底には皇室に對する崇敬親愛の情が常に流れて居る。

徳川幕府の威權赫灼たる際、漢學崇拜の方に熾んなるとき、孔子

伊藤仁齋

名は維楨
別號は古義堂
江戸時代の儒者
寛永二年(三三〇)
卒

贈正四位
年七十九

人間の種

みかどの御位は
いともかしこし
竹の園生の末葉
まで人間の種な
らぬぞやんごと
なき
(兼好法師、徒
然草)

聖徳太子

厩戸皇子
用明天皇の第一
皇子
推古天皇の皇太
子
推古天皇二十九
年(二二)薨
御年四十九

の大信奉者伊藤仁齋は、國人之を尊ぶこと天の如く、之を敬ふこ
と神の如し。と言つて、皇室に對する國民民衆の情を述べて居る。
朝威全く地に墜ちたかの如く見えた室町將軍の世の歌人も、人
間の種ならぬ」といつて、皇室に對
する國民的感情の失せないこと
を告げて居る。現人神と仰ぐ昔
ながらの心は、曾て消えることな
く、事ある毎に擡頭し來つて、この
國を維持する根本力となる。
我が國の明確なる自覺を證すべき修史の業を興された聖徳太
子の御時代は、如何なる時代であつたかといへば、外は支那隋の
國との交通によつて、これと對等なる政治的獨立國たることを



(鑑大傑人本日) 齋仁藤伊

覺り、佛像・經文・僧尼の崇拜につれて我が神祇の崇敬を新にし、古
道又は神道の名によつて我が固有の教を自覺し、而して内は氏
族の強大なる勢に面して、國の眞主の誰なるかの注意を喚起し



(物御室帝) 像御子太徳聖

た時代である。太子の憲
法第三に「詔を承けては必
ず謹め」とあるは、一句の中
に我が國體の神髓を擧げ
て盡くせるものである。
而してその結末に「謹まざ
れば自ら敗れん」とあるは我が國の歴史の審判の言葉であつて、
今に至るまでこの審判に毫も違ふことがない。
我が國民の皇室に對し奉る至上の尊敬親愛は民族精神の精髓

であり、國家統一の永遠の力であるが、すべて情は對するものに向かつて發するものであるから、この情を受けさせ給ふ皇室は、また必ず國民に對して特殊の情を抱かせられる。古語に、神は人の崇敬によつてその威を増し、人は神の加護によつてその福を得る」とある。國民のかくの如き崇敬によつて、皇室の稜威はかくも畏く、かくも輝くと共に、また皇室の御加護御愛撫によつて、國民は世界に比類なき幸を得て居り、又無疆の皇恩に浴して居る。蓋し崇敬親愛は臣子の情である。臣子の情あるところには君父の情が必ずある。君父の情とは教令愛撫の情に外ならぬ。教を以て命令し、愛を以て撫育するは君父を一にせるものである。國土及び民人とその祖を同じくする主は、君にして同時に父である。國民は同時に天皇の赤子である。この臣民

があつてこの君主があり、この子あつてこの父がある。臣子なき所に君父はない。臣子に對する教令愛撫の心の外に君父の心はない。即ち君父はない。君父とは教令愛撫の心の塊に外ならぬ。これ即ち、天皇の御心である。天皇のこの教令愛撫の御心は、昔ながらの教令愛撫の御心であつて、今更のものではない、即ち天祖の神慮、列聖の叡旨である。これ天胤一系の皇室にあつて必然のことである。それ故に天皇の國民に對して施し給ふ教令愛撫は、天皇の天祖列聖に對したまふ情、即ち敬神崇祖とひと續きである。而して天胤一系の皇室にあつては敬神と崇祖とは一である。天皇の國民に下したまふ教令は神皇の教令を承けさせられたもの、天皇の國民に施したまふ愛撫は神皇の愛撫を繼がせられたものである。この父子祖孫を通ずる教

令愛撫の御繼承は、祭祀の形に於て行はれる。この祭祀によつて、現人の天皇は神皇と一體にならせられる。これ即ち現人神の信仰である。神皇の御心の外に天皇の御心なく、幾代を重ねさせられても、歴代の天皇心は唯一であらせられる。即ち建國祖神の御心あるのみである。

國民に對して施したまふ教令愛撫の本たる天祖の教令愛撫の内容は何であるか。言ふまでもなく、教令は神勅に示させられた萬世一系の君臣の道と、親愛一體の父子の道とである。前者は天壤無窮の神勅に示され、後者は寶鏡をとつて御祝し遊ばされた神勅に示されてあるが、これは二にして一なるもの、一の中に他は必然含まれて居る。この二にして一なる教は神皇の子孫臣民に對したまふ萬古の教訓であり、後世忠孝の名によつて

寶鏡をとつて
お祝し遊ばさ
れた神勅

吾が兒此の寶鏡
を視ること當に
吾を視るがごと
くすべし與に床
を同じくし殿を
共にし以て齋鏡
と爲すべし
(日本書紀)

齋庭の穗

吾が高天の原に
きこしめす齋庭
の穗を以て亦吾
兒にまかせまつ
る(日本書紀)

示し給うた我が國の政教の根本原理である。即ち先に述べた我が國民の皇室に對する崇敬親愛の情に本づくものであつて、國民自身の固有せざるものを外から加へ來つたものではない。これ亦國土民人、祖神同根の自然の然らしむる所である。次に天祖の愛撫とは何であるか。天祖は天孫降臨の御時齋庭の穗を天孫にお授け遊ばされて、國民生活の資を給することを治國の第一となされた。民命といふことは我が建國精神の中に眼目となつて籠つて居る。我が國民は稲によつてその命を保つて來た。稲を「みたから」と呼ぶは朝廷に於てのことであつて、國民は皇室の大御寶である、その「おほみたから」を養ふ稲であるから「みたから」とせられる。かゝる言葉が、いかに國民が皇室にとつてはその總べてであるかを語つて居る。齋庭の穗の傳

上古聖王の迹
 大化元年秋七月
 戊寅天皇阿
 倍倉梯萬侶大臣
 蘇我石川萬侶大
 臣に詔して曰く
 當に上古聖王の
 跡に遵ひて天下
 を治むべし

(日本書紀)
 神祇を祭つて

大化元年秋七月
 己卯天皇阿
 部倉梯萬侶大臣
 蘇我石川萬侶大
 臣に詔して曰く
 あまねく大夫と
 百の伴造等とに
 悦ぶ心を以て民
 を使ふの路を問
 ふべしと庚辰蘇
 我石川萬侶大臣
 奏して曰く先づ
 以て神祇を祭り
 鎮めて然して後
 に政事をはかる
 べしと
 (日本書紀)

説古典は、我が建國が愛民を以て主とすることを語つて居る。神皇の御教を繼承してこの國を治めたまふ天皇は、それ故に祭祀を以て政の本となしたまふ。祭祀は即ち神の御教を繼承する所以の儀禮であつて、この儀禮の内容が教令愛撫の神意を宿すのである。

かの聖徳太子に始つた改新の端緒を承けて、遂にこれを實にせられた大化の新政は、支那唐の制度に倣はれたとのことであるが、外國の制度を摸倣せられようとするに際して、上古聖王の迹に遵つて天下を治むべしと勅せられて居る。即ち國家治教の根本は、昔ながらの我が神皇の御法に由らせられるのであつて、外國制度の摸倣は、たゞこの根本的規範を時勢に應じていかやうに實現するかの技術に屬するのみである。而して上古聖王

の迹に遵ふ形式は、神祇を祭つて然る後政治を議すべしといふにある。これ亦かの新政に臨んで大臣の奏上した所である。この祭祀の最大重要なものは大嘗祭であつて、天皇親ら新稻を烹熟して天神を祭らせられることがこの大祀の主眼である。即ち天祖が民命を重んじたまふ天意を永く忘れず、國民生存の本に報ずるといふことが、政の根本である。故に新に即位したまふに際して、必ずこの大嘗祭を行はせられる。毎年の新嘗祭も全く同じ意味のものである。



大嘗宮 (山口蓬春筆)

新嘗とは、にひなへ」と讀

み、新^に稻^{しね}を以て神を饗する意であるとせられて居る。又この大嘗祭に於て古來天神の壽詞^{よじ}を奏するといふことがある。天神の壽詞とは即ち天壤無窮の皇位を奉祝する詞である。即ちこの大嘗祭には民命を本とする神皇建國の精神と、寶祚無窮の國體とが縮圖的に示されて居る。この御祭の儀禮は我が國體を象徴するものである。この儀禮を履むことによつて、新に御位に即かせ給ふ天皇は祖訓に従つて政教を國民に施し給ふ意を體せられるのである。故に明治天皇の御製にも、

神代より受けしたからをまもりにてをさめ來にけり日
の本つ國

とあり、又

我が國は神の末なり神まつるむかしのてぶりわするな

よゆめ

ともある。

古い國といふべきものは、常に新なるものことである。常に新といふは、昔がさながら今であることをいふ。その時々に変り果てて、昔の意が少しも留らず、前後に何の連なりも無いものは、その昔といふは今にとつては無いと同然であるから、古い國とは言はれぬ。新といふは古と連ねてこそ新であるから、古をもたぬ國は實は古と共に新をもたぬのである。死を知らぬのが眞に生けるものであるが、かゝる生けるものこそ、古くして常に新なるものである。天祖の御教が今に天皇の御勅として國民に行はれ、建國の精神が今に天皇の御政治として國中に實現せられて居る我が國柄こそ、眞に生けるものの姿である。

(我が國體及び國民性について)

二 寧樂の句

近江の荒都
天智天皇の都さ
れた近江の天津
宮の舊址
滋賀縣近江國滋
賀郡滋賀村滋賀
の里崇福寺の地
が内裏のあつた
處だといふ
大津市の北四軒
柿本人麿
藤原朝時代の歌
人
持統・文武兩天
皇の御代の人
奈良山
奈良市の西北に
ある山
歌姫越

近江の荒都を過ぐる時よめる歌 柿本人麿
玉櫛 畝傍の山の 樞原の ひじりの御代ゆ 生れま
しし 神のことく 樛この木の いやつぎくくに 天
の下 知ろしめししを 天そらにみつ 大和をおきて あ
をによし 奈良山をこえ いかさまに 思ほしめせか
天さかる 鄙にはあれど いはばしの 近江の國の
さゝなみの 大津の宮に 天の下 知ろしめしけむ
すめろぎの 神のみことの 大宮は こゝと聞けども
大殿は こゝと言へども 春草の 茂く生ひたる 霞

辛崎
滋賀の都の琵琶
湖に臨めるとこ
ろ

山部赤人
奈良時代の歌人
聖武天皇に仕へ
た

立つ 春日の霧れる もゝしきの 大宮處 見ればか
なしも

反歌

さゝなみの滋賀の辛崎さきくあれど大宮人の船待ちか
ねつ
さゝなみの滋賀のおほわだ淀むとも昔の人にまたも逢
はめやも

富士山を望みて

山部 赤人

天地の わかれし時ゆ 神さびて 高く貴き 駿河な
る 富士の高嶺を 天の原 ふりさけ見れば 渡る日
の 影も隠ろひ 照る月の 光も見えず 白雲も い
行きはゞかり 時じくぞ 雪は降りける 語り継ぎ

言繼ぎ行かむ 富士の高嶺は
反歌

田兒の浦ゆ打出でて見れば眞白にぞ富士のたかねに雪
は降りける

思子等歌

山上憶良

釋迦如來金口正說 等思衆生如羅睺羅 又說 愛無
過子 至極大聖尙有愛子之心 況乎世間蒼生誰不

愛子乎
宇利波米娑 胡藤母意母保由 久利波米娑 麻斯提斯
農波由 伊豆久欲利 積多利斯物能曾 麻奈迦比爾
母等奈可々利提 夜周伊斯奈佐農

山上憶良

藤原奈良時代の

歌人

遣唐使の隨員

筑前守

天平五年(三九三)

卒

年七十四

等思衆生

吾觀衆生無

偏黨如羅怙

羅

(最勝王經)

羅睺羅

釋迦の子

十大弟子の一人

懐脚懐吉抱席因此馳峰上奏望清塵
二有天平二年庚子夏六月師大律師忽生
一有一首由山田守君海岳
周村在巽岡山子持超日志手向好為
と迄其悔
右一名此世大律師存氏
唐乃備道念
單枕高胡長身家見別の留本也
大筆六箇大律師胡長身家見別の留本也
月夜亦直相在登岡
大律師乃見律師者不志根指眼有
有故女王執一者
師天者自就可宿長年
山首之實不減古字吾余の依言礼
墨坂二白鏡至有者如是有意障未相尔
園大律師眼如歌三首

反歌
銀母金母玉母奈爾世武爾麻佐禮留多可良古爾斯迦米夜
母

喻族歌

大伴家持

ひさかたの 天の門開き 高千穂の 岳に天降りし
皇祖の 神の御代より 櫛弓を 手握り持たし 眞鹿
兒矢を 手挟み添へて 大久米の ますら健男を 先
に立て 鞆取負ほせ 山川を 岩根さくみて 履みと
ほり 國覓ぎしつゝ ちはやぶる 神をことむけ ま
つろはぬ 人をもやはし 掃き浄め 仕へ奉りて 秋
津洲 大和の國の 樞原の 畝傍の宮に 宮柱 太知

喻族歌

出雲守大伴古慈
悲が淡海三船の
讒言によつて免
官された時家持
が大伴氏の一族
に喻した歌
大伴家持
奈良朝の歌人
旅人の子
延暦四年(四四五)
卒

り立てて 天の下 知らしめしける 皇祖すめらみの 天の日
 繼と つぎて来る 君の御代々々 隠さはぬ 明かき
 心を 皇方すめらみに 極めつくして 仕へ来る 祖おやの司と
 言立てて 授け給へる 生みの子の いやつきくりに
 見る人の 語りつきでて 聞く人の 鑑にせむを あ
 たらしき 淨きその名ぞ おほろかに 心思ひて 虚
 言も 祖の名斷つな 大伴の 氏と名に負へる ます
 らをの伴

反歌

劔太刀いよとぐべしいにしへゆさやけく負ひて來に
 しその名ぞ

酒を節度使卿等に賜ふときの御歌

聖武天皇

第四十五代
 天平勝寶八年(一
 四六崩
 壽五十八

聖武天皇

大丈夫ますらをの行くといふ道ぞおほろかに思ひて行くな大丈
 夫の伴

筆蹟

有間皇子自傷
 結松枝歌二首
 家有者筍爾盛飯
 乎草枕旅爾之有
 者推之葉爾盛
 いへにあれはけ
 にもるいひをく
 さまくらたひに
 しあれはしひの
 はにもる

有間皇子自傷結松枝歌二首

家有者筍爾盛飯乎草枕旅爾之有者推之葉

余感

いづるあれをよもるいひをくさまくらたひに
 しあれはしひの

元暦本校萬葉集

志貴皇子

歌人
 天智天皇の皇子
 靈龜二年(三六)
 薨

志貴皇子

石ばしる垂水の上のさ蕨の萌えいづる春になりける

輕皇子
天武天皇の御孫
草壁皇子の御子
安騎野
奈良縣宇陀郡

高市黑人
藤原朝時代の歌人

かな

輕皇子安騎野に宿し給ふ時よめる歌

柿本人麿

ひむがしの野にかぎろひの立つ見えてかへりみすれば
月傾きぬ

高市黑人

いづくにか舟はてすらむ安禮の崎漕ぎたみ行きし棚無し小舟

大唐に在る時本郷を憶ひてよめる歌

山上憶良

いざ子どもはやも日本へ大伴の御津の濱松待ちこひぬらむ

楸

ひさかきともいふ楊桐科の常緑樹

山部赤人

芳野離宮
奈良縣吉野郡中
莊村宮瀧にあつたといふ

ぬばたまの夜の更けぬれば楸生ふる清き河原に千鳥しば啼く

勅
聖武天皇の

暮春の月芳野離宮に幸せる時勅を奉りて

大伴旅人

象の小川

奈良縣吉野郡中
莊村宮瀧にある
象山より出て吉
野川に入る小川

むかし見し象の小川を今見ればいよ、清けくなりけるかも

布勢水海

富山縣越中國氷見郡氷見町にある十二町潟今は干拓されて小さくなつた

布勢水海に遊覽し、船を多祢灣に泊めて、藤の花

大伴家持

多祢灣

氷見町の南四軒田子
もとは布勢水海がこゝまでつゞいてゐた

藤浪の影なる海の底清みしづく石をも玉とぞ吾が見る

興に依りて詠める歌
大伴家持

わが宿のいさゝ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

天平五年
聖武天皇の御代
(二三三)

天平五年遣唐使の船難波を發ちて海に入る時
母の子に贈れる歌
讀人 不知

旅人の宿りせむ野に霜降らばわが子はぐくめ天の鶴群トビ

防人歌
有度部 牛麿ウタテ

水鳥のたちのいそぎに父母に物言はず來にて今ぞくやしき

元興寺

もと蘇我馬子が
大和國高市郡飛
鳥に立てた寺で
法興寺ともいつ
た今の飛鳥大佛
の地
奈良朝になつて
奈良の左京に移
り新元興寺とい
ふ
この歌は天平十
年(二二八)の歌

今奉部與曾布いままつりべのよそぶ

今日よりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出て立つ

われは

白ら嘆く歌

元興寺の僧

白珠は人に知らえず知らずともよし知らずとも吾し知

れらば知らずともよし (萬葉集)

島木赤彦

本名久保田俊彦
歌人
教育者
明治九年長野縣
上諏訪町生
大正十五年歿
年五十一

三 歌の調子

島木赤彦

短歌に於ける表現は、單に歌の言語の持つ意味のみで足れりとすることは出来ません。その表現しようとする感動の調子が、歌の各言語の響や、それらの響をつらねた全體の節奏の上に現れて、始めて歌の生命が生まれるのであります。歌の言語の響、節奏、これを歌の調しらべ、調子若しくは聲調、格調等と謂ひます。

我々の感動は、伸びくと働く場合、ゆるくと働く場合、切迫して働く場合、沈潜して働く場合といふやうに、個々の感動に皆特殊の調子があります。その調子が、さながらに歌の言語の響や全體の節奏に現れて、始めて表現上の要求が充たされるのであります。この調子の現れは、意味の現れと相軒軽するところな

柿本人麿歌集

萬葉集に引用せ

られた歌集

滅びて傳はらな

い

弓月が嶽

奈良縣磯城郡纏

向村にある山

三輪山の近く

いほど、短歌表現上の重要な要求になるのでありまして、古來よりの秀作は、皆歌の調子が作者感動の調子と快適に合つてゐるために、永久の生命を持つてゐるのであります。例へば、柿本人麿歌集中にあるといふ

あしびきの山川の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ちわ

たる (萬葉集卷七)

の歌について言ひましても、山川の瀬の鳴るなべに」と一氣にすすんで第四句を呼起すところに、多く生動の趣があるのであります。この「なべに」といふ濁音を含んだ第三句が、第四句二箇の濁音と相俟つて山川の景情を生動させてゐる勢は、これを他の如何なる句法を以てしても言換へることの出来ないものでありませう。これは勿論「なべに」の持つ意味より來る力もあるの

であります。響から來る力と、その響の全體の節奏に及す影響とが大きいのです。殊に、第一二句「互爾波」の疊用を受けて、鳴るなべに」と押し進んでゆく勢を想ふべきであります。第四五句は、これに對して更に非常の力を以て据つてゐるのであります。金剛力を以て前句を受け且結んでゐるといふ概があります。この力も主として調子の上に現れてゐるのであります。第五句二五音が、主として力の中心となつて居ります。試に、第五句を「雲ぞ立つなる」白雲立つもなどの三四音、四三音としたら、どうでありませうか。歌の力がめちやく／＼に碎けてしまふであります。歌の生命が内容や材料よりは、調子にあることが分ります。この歌實に、山河自然の景物に對して作者の心中に動いた寂寥感が徹底して歌の調子に現れてゐるのであ

りまして、かやうな歌によつて歌の調子を會得することはためになることとあります。

み吉野の象山みやまのまの木ぬれにはこゝだもさわぐ鳥の聲

かも (萬葉集卷六)

これは山部赤人の歌であります。「山のまは山の際、木ぬれは木の末」こゝだは「許多」の意であります。この歌、山河自然の風物に對してゐる境地が、前の人麿の「あしびきの山川の瀬の」の歌によく肖てゐるのみならず、み吉野の象山のまの「と豆爾波」のを疊用して初句を起してゐる手法までも、よく肖て居るのであります。が、第三句以下にいたつて、全く前者と異なる感動をあらはして居ります。これは前の人麿の歌の、第四句に至つて突然山の名を提示し來つた勢に比して、み吉野の象山のまの木ぬれには「と

呼びかけた句法が、直ちに第四句以下と相聯つて、一首を直線的に押し進めてゐるからであります。こゝだもさわぐ鳥の聲かも「四三音三四音の諧調が、人麿の「弓月が嶽に雲立ちわたる」の七音二五音の諧調と、自ら別趣の勢をなして居ります。人麿のあの歌は、人麿の雄渾な性格に徹して、おのづから人生の寂寥所に入つて居ります。赤人のこの歌は、赤人の沈潜した靜肅な性格に徹して、同じく人生の寂寥所に入つて居ります。入つてゐる所は同じであつても、感動の相は、個性の異なるがまゝ、にちがつてゐるのであります。それが自然に歌の調子に現れるのであります。人麿の歌は、數歩を過れば騒がしくなりませう。赤人の歌は、數歩を過れば平板になりませう。これは皆兩者の歌の調子から來てゐる相違でありまして、調子の相違は兩者性格の

相違から來てゐること勿論であります。猶この赤人の歌で、上句を受ける第四五句に重々しい響を持った詞の多いといふことが、讀者の感動を異常な所へ誘つて行く力になつてゐることに注意すべきであらうと思ひます。

春すぎて夏きたるらし白妙のころもほしたり天の香具

山 (萬葉集卷一)

持統天皇の御歌として知られて居ります。第二句と第四句で切れてゐるために、調子が落着いて、初夏の心持が現れて居ります。第五句の名詞どめも、この場合よくすわつて、動かさない重みを持つて居ります。秀作であると思ひます。歌の命は、大抵第五句で定まります。第五句だけでは無論定まりませんが、少くとも第五句の調子が輕ければ、歌全體を輕くしてしまふやう

であります。これは、前に挙げた例について見ても分ります。萬葉集には、字餘りの句が多いのであります。それは、大抵第五句にあるやうであります。それも第五句の調子を重くしたいといふ自然の要求から來てゐるのであらうと思ひます。

吉野なる夏實の川の川淀に鴨ぞ鳴くなる山かげにして

(萬葉集卷三)

夏實の川
吉野川の上流
いま宮瀧の上
に菜摘村がある
湯原王
天智天皇の皇孫
施基皇子の御子
光仁天皇の皇弟

湯原王の御歌であります。第一句からすらくと連續した句法を第四句で一旦踏切つてゐるために、緊りと勢が生じ、さらに「山かげにして」といふ生動の句を据ゑて、この句一首全體に反響するほどの力になつて居ります。感嘆に値する作であります。

以上の例は、皆萬葉集から挙げました。今一つ、源實朝の歌を舉

げます。

大海の磯もとゞろに寄する波割れて碎けて裂けて散る

かも (金槐集)

波の鞆踏と寄せかへす景情に對して、割れてといひ、碎けてと重ね、裂けてと疊んで、その重疊の勢を「かも」といふ強い響で結んだ力を想ひ見るべきであります。一本、第三句「よる波の」とありますが、これは、必ず「よする波」と一旦踏切らねば歌の勢を成さぬのであります。波の姿と、感動の姿と、そしてそれを現した歌の姿と、如何によく一致して居るかを知ることが出来ませう。

以上諸例によつて、少しく歌の調子を説きましたが、心の相が人に異なり、一人の心も様々に動くのでありますから、その動きの状が如何にして歌の調子に現れるかといふことは、到底説き

相馬御風

名は昌治

文學者

明治十六年(一五)

三新潟縣生

日本書紀

三十卷

六國史の一

神代より持統天

皇に至る編年史

舍人親王撰

盡くせる筈がありません。只、それが如何なる心の動きであら

うとも、調子の上に緊張して現れて居らねばならぬことは、どの歌にも通じて言ひ得る所であります。柔きものは柔きに緊張して居り、強きものは強きに緊張して居り、暢やかなるは暢やかなるに緊張して居らねばなりません。而してその緊張の快適に現れてゐるのが萬葉集であります。左様な歌の調子を我々は萬葉調と唱へてゐるのであります。緊張の調子が緊張の主觀から生まれることは贅言に及びません。(歌道小見)

四 古事記を讀みて

相馬御風

我々の祖先の最も力ある生活を後世の我々に示すものは、ひとり古事記並に日本書紀あるのみである。殊に古事記にあつて

は、徹頭徹尾、潤飾なき日本民族そのものの生活の記録である。その史實上の價値はどうであつても、とにかく我等の祖先の生活全體が、かの古事記全卷に表象化せられてゐることだけは、疑ふわけにはゆかぬ。そして我々日本民族の生活史の殆ど全部を包んでゐるといつてもいゝほどな、かの佛・儒二教の空氣の全然混じてゐない我が民族の記録は、たゞこれあるのみである。此の點に於て、我が民族にとつて最も尊い、そして最も廣く最も深く讀まれ味ははるべき書物は古事記である。古事記は實に我等日本民族の生活の源であると思ふ。

古事記を讀んで我々の感ずるところのものは、たゞ偏に生きんとする人間の力である、あらゆるものを自己の生活に統一しようとする努力である。彼等は人間の生活を離れた自然を觀な

かつた。彼等は人間を離れた神を認めなかつた。彼等の觀た自然は人間生活の一部で、彼等の認めた神は人間の生活力の象徴であつた。彼等は、その身に纏ふべき衣服の材料を彼等に供給する蠶も、彼等の生命を繋ぐべき稻も、粟も、小豆も、麥も、大豆も、皆彼等の肉體から分化して出たものと觀た。それ程までに彼等は人間の生活を擴大してゐた。彼等の眼中には、人間の運命の最後は死でなくして、發展極りなき生であつた。死の國にある伊邪那美^{いざなみ}の命が、汝^{みまし}の國の人草、一日に千頭^{ちやう}絞^{しぢ}り殺さな。といはれたのに對して、生の國にある伊邪那岐^{いざなぎ}の命は、汝^{みまし}然^{しか}し給はば、吾^{われ}はや一日に千五百^{ちひひ}の産屋^{うぶや}立ててむ。と答へられた如きは、最もよくその間の消息を傳へてゐる。殊に古事記全卷を通じて、熱烈な生の力が飽くまでも死の力と戦つて、それに打勝たう、それを脱け

ださうと悶えてゐる事實が、到るところに書かれてゐることは最も注目すべきことである。後世の日本人に見るが如き、死に對してひたすら悲しむやうな態度は少しも見えない。死に對

故於天照大神見畏用天石屋戸而刺許母理此三字以音坐也爾高天原皆暗葦原中國悉闇自此而常夜往於是萬神之聲者狹蠅那須此二字以音滿萬妖悉發是以八百萬神於天安之河原神集々而訓集云都度比高御產巢日神之子思金神令思訓金云加尼而集常世長鳴鳥令

古 春 事 本 記
古 歎きはては
春 あきらめる
事 諭 やうなこと
本 は、我等の祖
記 先にはなか
つた。彼等

の死に對して悲しみ歎く感情は、常に一轉して死に對する憎惡の念となり、挑戰の力となつた。彼等は死といふ事實に對して

あきらめる代りに戰つた。彼等はいかなる境遇にあつても常に生きんことを欲した。生きようと努力した。彼等の生の欲求は、死をも生に變へなければ止まなかつた。次に我等祖先の神は人間の生活力の象徴である。實際我々の祖先くらゐ、なんでも神といふ尊稱をつけた民族は他にない。さうかといつて、他の未開の民族に見るやうな多神的でもなく、また野蠻な自然物崇拜でもなかつた。神はすべて人間であつた。威力を有する人間は即ち神であつた。隨つて、謂はゆる敬神の念には、救済を祈るやうな分子はなかつた。敬神はたゞ肉身の源、生命の源たる祖先に對する崇拜に過ぎなかつた。神を以て人間に對する絶對的の主權者とは思はなかつた。敬神は絶大な人格に對する讚美と自己の生命の源に對する讚美とに

外ならぬのであつた。祈念はまた常に幸福本位であつた。我を捨てて神にすがるといふよりは、私の生活の幸福に對する神力を希ふに外ならぬのであつた。要するに、神は生活の主權者ではなくして、自己の生活力の擴大せられた象徴に過ぎなかつた。この生の發展、生の擴大といふところに強固な基礎を有する我等の祖先の敬神觀念は、他面に於てその念力に逆らふところのものの衰滅を信じた。偏に生活の發展と擴大とを意志とした我等の祖先の生活は、隨つてまた非常に努力的なものであつた。境遇に屈することを知らぬその生活は、常に意志そのものの悲劇であつた。我が國の文藝的產物で、悲痛な生活意志の發現を見得るものは、古事記を措いて他にないといつてよいからである。この點に於て

最高な意味の悲劇的人格は、我が國の歴史中、古事記以外には求め得られないと思ふ。

古事記中に書かれた數多ある悲劇的人物の中で、最も我々の心を惹くのは日本武尊である。尊はいかなる難事をもし遂げて自分の力を發展させようとされた。自分の御事業の爲に最愛の後弟橘姫が眼前で犠牲となられるのを敢へて忍ばれた。しかしそれでゐながら、尊はなほその妻を慕ひ給うて、阿豆麻波夜アヌマハの歎聲をお漏らし遊ばされた。かくて、尊はあらゆる困難と戦ひ、あらゆる危険を冒して東北地方平定の大任を一步步に果された。自己の苦しい境遇を知りながらも、なほ自己の努力を惜しまれなかつた。しかし、その御運命は遂に不幸なものであつた。いかなる強敵に對しても

屈し給はなかつた尊も、病氣には敵し得られなかつた。東北討伐の大業を果されて都へ歸り給ふ途上、尊は終に伊勢で此の世を去られた。「吾が心恆に虚よりも翔り行かむと念ひつるを、今吾が足え歩まず、當藝斯の形に成れり」といふ尊の御歎聲には、實に悲壯な響が籠つてゐる。歩一步に疲れて衰へゆく病軀をよろめき運び給ひながら、尊は絶えず故郷なる大和の國を戀ふる歌をうたはれた。歌ひながら終に斃れられた。就中、

命の またけむ人は たゞみこも 平群の山の 熊白禱
が葉を 髻華にさせ その子

といふ御歌の如きは、最もよく尊の生を愛せられる心の熱烈であつたことを示してゐる。身は逆境にあつて、旅に斃れようとされながらも、なほかつ命の全からん故郷人よ、汝等の命の全か

らんかぎりは、熊白禱の葉を頭に飾つて、楽しく面白く遊べ」と歌ひ給ふ。これを後世の死を悲しみ、運命を恨む數多の人々の歌とくらべて見ると、當時の人々の生活に對する心持の如何に積極的であつたかに驚かれるではないか。更に驚かれることは、日本武尊が薨去の後、大きな白鳥と化して、所定めず、行方知れず、天翔り行き給うたことである。御子たちが哭き叫びながら慕ひ追ひ給ふをも顧みられないで、かの大きな白鳥は、野より海へ、海より山へ、山より海へと、天翔り天翔つて、最後はその行方が知れなくなつた。その白鳥の止る處に造られた幾つかの御墓は、遂に日本武尊の最後の御住家ではなかつた。御墓はすべて空虚な外形のみで、日本武尊その人の御生命は、遂に止る所を知らなかつた。發展極りなき日本武尊の御生命は、結局、御墓を脱れ

脱れて、生ける白鳥となつて天翔り行く生命であつた。いかなる境遇にあつても、尊の強烈な御生活力は常に外に向かつて發展した。この偉大な御生活の發展力の向かふところ、尊はいかなる敵とも戦ひ、いかなる敵をも斃さねば止まれなかつた。尊は自ら知り給ふ逆境裡にあつて、死に瀕し給ひながらも、なほ御聲をあげて生を讚美する歌をお歌ひなされた。尊は死し給うてもなほ御墓の暗闇を脱れて、天翔り天翔り給うた。かくの如く最後までも熱烈な生の力の充滿した生涯は、我が國の文藝的産物中、古事記を措いて他のどこに見出し得られようか。尊を通じて感ぜられる我等の祖先の生活そのものに對する心持が、いかにも我々には慕はしいのである。人間の生活意志そのものの悲痛な發展は、我が國の藝術的産物中、ひとり古事記に

於てのみ見られると思ふ。

外に向かつて最近著しい國家的發展をなし來つた我が日本民族は、內的方面にも亦最近著しい革新の行程を辿りつゝある。無論それは外國思想の影響が多分にあるのだが、しかし、大體からは從來の消極的思想に對する新たな積極的思想の勃興と見て差支なからう。長い年月の間續いて來た我々民族の消極的生活に對する新しい生活慾の勃興、その生活全體の革新の過渡期それが現今の我が文藝界を中心とした思潮の情態ではなからうか。かう考へて見て、更にかの古事記時代に於ける我々祖先の積極的生活の空氣を味はつて見ると、我々には一種堪へがたい憧憬の念が湧くのを覺える。(黎明期の文學)

天石屋戸

小學國語讀本卷五、一、「天の岩屋」参照

五 天石屋戸

頸珠

玉を緒に貫いて頸にかけるもの

この時伊邪那岐命、いたく歡ばして、詔りたまはく、あれは御子生み生みて生みの終に、三柱の貴の御子を得たり。」と詔りたまひて、即ちその御頸珠の玉の緒もゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、汝が命は、高天の原を知らせ。」と事依さして賜ひき。次に月讀命に詔りたまはく、汝が命は、夜の食國を知らせ。」と事依さしたまひき。次に建速須佐之男命に詔りたまはく、汝が命は海原を知らせ。」と事依さしたまひき。かれおのもく、依さしたまへる命のまに、知ろしめす中に、速須佐之男命依さしたまへる國を知らさずて、八拳鬚、心前に至るまで啼きいさちき。その泣きたまふさまは、青山を枯山なす泣枯らし、海河はことく、に泣乾しき。こゝをもて、荒ぶる神の

根の堅洲國
黄泉の國

多賀
近江國犬上郡多賀村官幣大社多賀神社

なせ
男子を親しんでいふ語

音狭蠅なす皆わき、萬づの妖、ことく、におこりき。かれ伊邪那岐大御神、速須佐之男命に詔りたまはく、何とかも汝は事依させる國を知らさずて、哭きいさちる。」と詔りたまへば、申したまはく、「あは妣の國、根の堅洲國に罷らむとおもふが故に哭く。」と申したまひき。こゝに、伊邪那岐大御神、いたく怒らして、然らば、汝は此の國にはな住みそ。」と詔り給ひて、乃ち神やらひにやらひ給ひき。かれ伊邪那岐大御神は、淡海の多賀になまします。かれこゝに、速須佐之男命申したまはく、然らば、天照大御神にまをして罷りなむ。」と申したまひて、乃ち天に參上ります時に、山川ことく、に動み、國土皆揺りき。こゝに、天照大御神聞き驚かし、あがなせの命の上り來ますゆゑは、必ずうるはしき心ならじ、あが國を奪はむとおもほすにこそ、とのり給ひて、即ち御髪を解

みづら 上代の男子の髪
 の結び方
 髪を頭の中央で
 左右へ分けて耳
 の處で箱ねて眞
 中を緒で結んで
 垂れるもの
 後にはびんづら
 といふ
 須麻流
 統の意で緒を貫
 くこと
 千入
 千篋入
 矢を盛つて背に
 負ふ具
 輓
 弓を射るとき左
 の臂につける半
 月形の皮具

き、御みづらに纏かして、左右の御みづらにも、御鬘にも、左右の御
 手にも、みな八尺の勾璫の五百津の美須麻流の珠をまきもたし
 て、背には千入の輓を負ひ、五百入の鞆をつけ、また臂に稜威の高
 鞆をおぼして、弓腹ふりたてて、堅庭は向股に踏みなづみ、沫雪な
 す蹴ゑ散かして、伊都の男建び踏み建びて、待ち問ひたまはく、な
 ど上りきませる。と問ひ給ひき。こゝに速須佐之男命申したま
 はく、あは邪き心なし。唯大御神の命もちて、あが哭きいさちる
 ことを問ひたまひし故に、申しつらく、あは妣の國にまからむと
 思ひて哭く。と申ししかば、大御神「汝は此の國にはな住みそ。」と詔
 りたまひて、神やらひやらひたまふ故に、罷りなむとするさまを
 申さむと思ひてこそまる上りつれ。けしき心なし。と申したま
 へば、天照大御神、然らば、汝の心の清明きことは如何にして知ら

うけひ
 誓ひ
 天の安河
 高天原にある河

まし。とのりたまひき。こゝに速須佐之男命、おのもく、うけひ



天の岩戸の芳年筆

て、御子生まな。と申したまひき。
 かれ爾に、おのもく、天の安河を中
 におきて、うけふ時に、天照大御神ま
 づ建速須佐之男命の佩かせる十拳
 の劍を乞ひわたして、三段にうち折
 りて、ぬなとももゆらに、天の眞名井
 に振り滌ぎて、さがみにかみて吹き
 棄つる氣吹の狭霧になりませる神
 の御名は、多紀理毘賣命、又の御名は
 奥津島比賣命とまをす。つぎに市
 寸島比賣命、またの御名は、狭依毘賣

命とまをす。つぎに多岐都比賣命。速須佐之男命、天照大御神の左のみ、づらに纏かせる八尺の勾璫まがたまの、五百津いほづのみすまるの珠を乞ひわたして、ぬなともゆらに、天の眞名井にふり滌ぎてさがみにかみて吹きうつる氣吹の狭霧になりませる神の御名は正勝まさかつ吾勝わかつ勝速日かつはやひ天之忍穗耳命あめのしのほみみ。また右のみ、づらに纏かせる珠を乞ひわたして、さがみにかみて、吹きうつる氣吹の狭霧になりませる神の御名は、天之善卑能命あめのぜんひの。また御かづらに纏かせる珠を乞ひわたして、さがみにかみて、吹きうつる氣吹の狭霧になりませる神の御名は、天津日子根命あまのひこね。又左の御手に纏かせる珠を乞ひわたして、さがみにかみて、吹きうつる氣吹の狭霧になりませる神の御名は、活津日子根命いほづひこね。また右の御手にまかせる珠を乞ひわたして、さがみにかみて、吹きうつる氣吹の狭霧にな

りませる神の御名は、熊野久須毘命くまのひさすび。こゝに天照御大神速須佐之男命にのりたまはく、この後にあれませる五柱の男子むこは、物實ものざねあがものによりてなりませり。かれおのづから吾が御子みこなり。さきにあれませる三柱の女子むめは、物實ものざね汝のものによりてなりませり。かれ乃ち汝の御子なり。かく詔り別けたまひき。こゝに速須佐之男命、天照大御神に白したまはく、あが心清明き故に、あが生める御子、手弱女たわやめを得つ。これによりて申さば、おのづから吾勝われちぬぬといひて、勝ちさびに、天照大御神の御營田みつうでの畔あ放ち、溝埋うらめ、またその大嘗おほほきこしめす殿とのに、屎くそまり散らしき。かれしかすれども、天照大御神は、咎めずてのりたまはく、尿しなすは醉よひて吐つきちらすところ、あがなせの命、かくしつらめ。又田の畔放ち、溝埋うらむるは地ちをあたらしところ、あがなせの命、かくしつ

忌屋服
神に獻る衣を織
る清淨な御殿

高御産巢日神

高天原に始めて
生まれ出でた三
柱の神の一

思兼神

多くの人の思慮
を一人で兼ね有
つほど智慧のあ
る神

長鳴鳥

鶏

らめと詔り直したまへども猶その惡しき態止まずてうたてあり。天照大御神、忌服屋にましまして、神御衣織らしめたまふ時に、その服屋の頂を穿ちて、天の斑馬を逆剝に剝ぎて、墜し入るゝときに、天衣織女見驚きて、みうせにき。かれこゝに、天照大御神見畏みて、天の石屋戸を閉てて、さしこもりましましき。すなはち高天原皆暗く、葦原中國ことごとくに闇し。これによりて、常夜ゆく。こゝに萬づの神のおとなひは、狭蠅なす皆わき、萬づの妖ことごとくにおこりき。

こゝをもて、八百萬の神、天安之河原に神集ひ集ひて、高御産巢日神の御子、思兼神に思はしめて、常夜の長鳴鳥を集へて、鳴かしめて、天の安河の河上の天の堅石を取り、天の金山の鐵を取りて、鍛入天津麻羅をまぎて、伊斯許理度賣命におほせて、鏡を作らしめ、

天の香山

高天原にある山
それが後に二つ
に分れて伊豫と
大和に落ちて來
たといふ

和幣

ゆふともいふ
楮や麻の繊維で
織つた布

日蔭

日蔭のかづら
まよさき
正木のかづら
つるまよさき

玉祖命におほせて、八尺の勾璫の五百津の御須麻流の珠をつくらしめて、天兒屋命、布刀玉命をよびて、天の香山の眞男鹿の肩をうつぬきに抜きて、天の香山の天のはゝかを取りて、うらへまかなはしめて、天の香山の五百津眞賢木をねこじにこじて、上枝に、八尺の勾璫の五百津のみすまるの玉を取りつけ、中枝に八尺鏡をとりかけ、下枝に白和幣、青和幣をとり垂てて、このくさぐさのもの、布刀玉命、太御幣と取りもたして、天兒屋命、太祝詞言ねぎ申して、天手力男神、御戸のわきに隠り立たして、天宇受賣命、天の香山の天の日蔭をたすきにかけて、天のまよさきを鬘として、天の香山の小竹葉を手草にゆひて、天の石屋戸にうけ伏せて、踏みとどろこし、神がかりして、胸乳をかきいで、裳紐をおしたれき。かれ高天の原ゆすりて、八百萬の神共に笑ひき。

こゝに天照大御神、怪しとおもほして、天の石屋戸を、ほそめに開きて、内よりのり給へるは、吾がこもりますによりて、天の原おのづから闇く、葦原中國も皆闇けむとおもふを、などて天宇受賣はあそびし、また八百萬の神もろくゝわらふぞとのり給ひき。乃ち天宇受賣、なが命にまさりて貴き神いますが故に、ゑらぎあそぶ。と白しき。かくまをす間に、天兒屋命、布刀玉命かの鏡をさしいでて、天照大御神に見せまつる時に、天照大御神、いよゝあやしとおもほして、稍、戸よりいでて臨みます時に、かの隠り立てる天手力男神、その御手を取りて、ひき出しまつりき。乃ち布刀玉命、尻久米繩をその御後方にひきわたして、こゝよりうちにな還り入りましそ。と白しき。かれ天照大御神、出てませる時に、高天の原も、葦原中國もおのづから照りあかりき。こゝに八百萬の神

尻久米繩
注連繩

千位置戸
千座にのせた澤
山な贖罪の品

忍坂
大和國磯城郡城
島村忍坂で土蜘蛛を撃たれるとき合圖によまれた御製
久米の子
道臣命の率ゐた久米部の兵士たち

共に議りて、速須佐之男命に、千位の置戸を負せ、また鬚を切り、手足の爪をも抜かしめて、神やらひやらひき。(古事記)

六 忍坂の大室屋

神武天皇

忍坂の大室屋に人多に來入り居り人多に入り居りともみづくし久米の子が頭槌い石槌い持ち撃ちてし止まむみづくし久米の子等が頭槌い石槌い持ち今撃たばよらし(古事記)

神武天皇

みづくし久米の子らが粟生には葦ひともとそねがもとそねめつなぎて撃ちてし止まむ(古事記)

神武天皇

みづくし 久米の子らが 垣もとに 植ゑし 薑はじかみ 口
ひびく 我は忘れじ 撃ちてし止まむ (古事記)

日本武尊

新治 筑波を過ぎて 幾夜か寝つる

火焼の翁

日々なべて 夜には九夜 日には十日を (古事記)

日本武尊

尾張に 直ただに向かへる 尾津の埼なる 一つ松 吾兄
を 一つ松 人にありせば 太刀佩はけましを 衣着きせ
ましを 一つ松 吾兄を (古事記)

大葉子

新治 筑波
共に常陸國の地名

尾津の埼
今の三重縣桑名郡多度村及び古濱村の地

大葉子
調吉士伊企儼の妻

韓國の 城の上に立ちて 大葉子は 領巾ひくれ振らすも
日本へ向きて (日本書紀)

雄略天皇

三吉野の 小室せむろが嶽に 猪伏すと 誰ぞ 大前に申す
やすみし、 我が大君の 猪待つと 吳床あぐらにいまし
白たへの 袖着そでぎ具ふ 手胼てびらに 蛇搔あひ着き その蛇を
蜻蛉 早咋あきひ かくの如 名に負はむと そらみつ
大和の國を 蜻蛉島とふ (古事記)

聖徳太子

しなてる 片岡山に 飯いひに飢うて こやせる その旅人
あはれ 親なしに 汝なれ成りけめや さす竹の 君はや
無き 飯に飢て こやせる その旅人 あはれ (日本書紀)

海行かば
聖武天皇の宣命
の中に見えた古
歌で大伴佐伯兩
氏の先祖の歌つ
たものといふ

藤岡作太郎

國文學者
文學博士
東京帝國大學文
科大學助教授
加賀國(石川縣)
金澤生
明治四十三年(二
五)卒
年四十一

海行かば 水づく屍 山行かば 草むす屍 大君の
讀人不知
へにこそ死なめ のどには死なじ (續日本紀)

七 上古の詩歌

藤岡作太郎

祝詞は普通散文として取扱はるといへども、その用神意を悦ばすにあり、一種の諧音を有せしめて、壇前に朗讀せるものなれば、一に節調を主とす。この意味に於て和歌と距ること甚だ遠からず、たゞかれが備へたる如き律格を缺くのみ、即ちこれを散文詩と呼ぶ最も當れり。されば祝詞の長所は聲調の整へるにあり、聲調の美にして、思想の比較的に見るべきものなきは、上古文學を通じたる性質なりといへども、祝詞に於て殊に然りとす。

その内容の長所をいへば、秋毫の包むなく、欺くなく、飾るなくして、天真のまゝに感情の流露せることなるべし。されどさすがにこれも時代の産物なり、その神々に向かひて告ぐるにも、しかじかの供物を捧ぐるが故に、願はくは風雨時を違へざれ、年は豊に、疫病の禍することなからんことをといへるなど、餘りに幼稚なりといはざるを得ず。行文また變化に乏しく、千篇一律の嫌なきにあらずといへども、譬喩の壯大にして、氣魄の雄渾なるは、後世よくこれに及ぶものなし。祈年祭の詞に、

天の壁たつきはみ、國の退きたつかぎり、青雲のたなびくきは
み、白雲のおり居、向伏すかぎり、青海原は棹楫ほさず、舟の舳の
至り留るきはみ、大海原に舟みちつゞけて、陸よりゆく道は、荷
の緒ゆひかためて、磐根木根ふみさくみて、馬の爪の至り留る

かぎり、長道間なくたちつゞけて、狭き國は廣く、峻しき國は平
らけく、遠き國は八十綱うちかけて引きよすることのごとく
……

といひ、また大祓の詞に、

科戸の風の天の八重雲を吹放つことの如く、朝の御霧、夕の御
霧を、朝風、夕風の吹拂ふことの如く、大津邊に居る大船を舳と
き放ち、鱸とき放ちて、大海原に押放つことの如く、彼方の繁木
が下を燒鎌の敏鎌もて打拂ふことの如く……

といへるが如き、以てその一斑を窺ふべし。これらの例に見る
も、祝詞の最も古きものは、また大和奠都以前海邊に棲居したり
し時代の餘風を帶ぶるものなきにあらずといへども、多くの祝
詞を綜合するに、最古の神話時代が漸く轉じて、農事の重視せら

れし時代に入りて製作せられしものなりと斷言するを憚らず。
祈年祭の詞、風の神の祭の詞、または大嘗祭の詞を讀め、いかに當
時の國民が耕耘の事に注意し、焦心して、年々の豊凶に全生命を
託したりしかを發見せん。またいはゆる天つ罪として大祓の
詞に擧げたる畔放、溝埋、樋放、頻蒔の類も、みなこれ農作に關する
罪名にあらずや。海事より農事に移れる太古國民生活の變遷
は、正に祝詞によりて反映せられたりといふべし。

上古の歌、最も古くは律格未だ定まらず、法則に拘束せられずし
て、思ふがまゝに感懷を行れりき。記紀の歌を計算するに、短歌
最も多くして、長歌これにつき、旋頭歌と片歌とは幾ばくもあら
ず。而してこれらのもの、いづれも詩形區々にして、一句二音な
るあり、四音なるあり、或は六音・七音・八音・九音に及ぶ。格調整ひ、規

旋頭歌
五七七五七七の
六句より成る一
種の歌
片歌
五七七の三句よ
り成る古歌

則生じて萬葉集に見ゆるが如き一定の歌體を成し、従つて想形二つながら見るべきものあるに至りしは、おほよそ漢文學の傳來せる應神天皇の朝より後のことといふべし。

上古の歌に取るべきは、祝詞におけると同じく、その外形にありて内容にあらざ、語句・語調にありて感情・思想にあらざ。構想直截明白なりといふの外また奇を認めざるに、措辭いかにも巧妙にして甚だ耳に快し。されど祝詞に比較するに、これには絶えてかれの雄大を見ず、かれが譬喩莊重森嚴、天地と共に大にして、聞くものをして轉、心懷をひろうせしむるあるに反し、これの何ぞ卑近にして平凡なるや。これ一は神に告ぐる祭文なるに、一は人間同志の間に謠はるゝもの、用途の差のやがてこの相違を生じたるや勿論なりといへども、余輩をして更に一步を進めて

言はしめば、前者はなほ未だ上古民族の抱懷せる征服的氣象を脱せざるに、後者は既に風光明媚の境に定着し、熙々たる春光に浴して、平和の情感を味はへるの相違に坐せずんばならず。試みに二者が用ひたる言辭を引きて比較せんか、等しく自然を寫しても、彼は偉大にして勢力あり變化あるものを好む、故に天といひ、雲といひ、霧といひ、潮といひ、風といふ。是は眼前卑近の小景物を捕ふ、故に谷のみ、磯のみ、河のみ、瀬のみ、島のみ、崎のみ。朝日の日照宮、夕日の日陰宮の二語に、日は僅かに見られたれども、月は詠まれず、星もなし。最も多きは日常目撃接觸する動植物・家具の類にして、動植物もまた實用的なるが多く、植物にては野蒜・粟生・葦・蔓・菁・大根・蓴・菱・栗花・橘・桑・榛・楓・榊・白檮・熊檮などいづれも衣食住もしくは祭祀の料たるべきもののみ、葉ひろ・五百箇・眞椿

などは實用の外にして、花も葉も賞せられ、一つ松といへるは姿のおもしろきを愛でたりけん、櫻花蓮花も歌はざるにはあらざれども、これらの花が歌材となることは極めて稀なり。動物また細螺・蟹・蠣・虹・蜻蛉・鮪・鯨・雀・鴨・鳴庭つ鳥・鷓鴣・隼・鶇猪馬の類を出でず、家具は、太刀・奥床・菅壘・絹壘の類を見る。男女の姿の玉に比べられたるはその例頗る多く、女子の後姿を小楯にたとへ、齒並の美しさを稱して椎實に似たりとも形容したりき。

古來自然の美を愛し、花木を翫賞するは、わが國民固有の特色の一なりと稱せらる。されど上古の類を見るに、純然たる敘景詩は甚だ尠く、むしろ人をして奇異の感あらしむ。日本武尊が、
鳴海らを見やれば遠し火高路にこの夕潮に渡らへむかも
と歌ひ給ひ、また

大和は國のまほろばたゝなづく青垣山ごもれる大和し美はし

と詠じ給ひし如き、一見敘景の詩なるが如きも、一は境に對して宮酢媛を慕ひ、一は大和を懷うて望郷の念を述べたる抒情詩のみ。應神天皇が菟道野の詠、

鳥羽の葛野を見れば百千足家庭も見ゆ國のほもみゆ

の如き、雄略天皇が初瀬野に出遊して、山野の形勢を見給ひてのこもりくの初瀬の山はいでたちのよろしき山わしりてのよろしき山のこもりくの初瀬の山はあやにうらぐはしあやにうらぐはし

の吟の如きは、やゝ客觀的敘景詩の體を得たるものといふを得べきが、この種の類は五指を屈するにも足らざるべし。花木に

宮酢媛
尾張氏の女

鳥羽

ちば
今とばといふ
京都の南
初瀬野
奈良縣磯城郡初
瀬町の近く

木花咲耶姫
瓊々杵尊の妃
吾田の大山祇の
女
稚櫻宮
履中天皇の皇居
磐余稚櫻宮

對する、また然り。後世花としいへばこの花となさるゝ櫻だに、
いまだ主題としては歌はれざりしなり。さはれ神代既に木花
咲耶姫の名あり、紀元後に稚櫻の宮の名あるを思へば、上代の民
も花の眞美を知らざるにあらず、賞せざるにあらず、唯いまだこ
れを歌に詠じて楽しむことをなさざりしのみ。

既に客觀に乏しうして敘景に貧なり、敘事詩もまた能くすると
ころにあらずとせば、剩すところは主觀的抒情詩のみ。げにや
抒情詩は當時の詩人が最も得意とせし壇場なり。武勇を唱道
し、兵氣を鼓舞するもかれらが好題目、後世のいはゆる祝言たる
新築を賀する歌、置酒高會の歡樂の歌など、また數、見る所にして、
従つて酒徳を稱へたるものも甚だ少からず。蓋し酒の穀物と
共に上代神饌の隨一たりしは、祝詞の明らかに示すところにし

て、酒の太古の神に人に離るべからざる附隨物たるは、洋の東西
を問はざるなり。

要するに眞率樸野は太古の國民の特性にして、恬澹快濶なる現
實主義は歌謠の上にもみなざれりといふべし。

(國文學史)

八 大丈夫の覺悟

幸田露伴

大丈夫、苟も身を學藝に委ねんとせば、まづ受發の二途に於て大
丈夫の覺悟あるを要す。

發とは外に内の發するなり。受とは内の外に受くるなり。受
くることは須く大海の百川を吞むが如くなるべし、發すること
は宜しく甘雨の八方に澆ぐが如くなるべし。受くることの多

幸田露伴
名は成行
文學者
文學博士
帝國藝術院會員
文化勳章第一回
の拜受者
慶應三年(五三七)
江戸生

からざらんことを嫌ひて、川の大、川の小を嫌はず、發することの豊ならざらんことを恐れて、方の東、方の西を問はず。これを受發二途に於ける大丈夫の覺悟とす。受くるに嫌ふところあり、發するに問ふところあるは、女兒の情のみ、大丈夫の覺悟にあらず。

受は發の本なり、發は受の末なり。途は二にして實は一。受をよくすれば發は其の中に在り。大賢は能く受く、中才は勉めて克く受く、賤人は好んで受くるあり、敢へて受けざるあり。誓つて必ず賤人たらざらんことを期する、之を眞に身を學藝に委ぬといふ。

受の途に於て工夫刻苦するものは學藝を成すに庶幾からん。受の途に於て大丈夫の覺悟なきものは、爲すにだに堪へざらん

とす。何ぞ成ることあらん。

評の性は多く褒貶毀譽を具し、人の情は常に譽を愛し、褒を愛して、毀を惡み、貶を惡む。こゝに於て毀譽褒貶の我が頭上に加へらるゝや、大丈夫の覺悟なき者、或は徒に懼れ、或は徒に驕り、或は人を恨み、或は自ら足れりとして、惜しむべし、堂々たる六尺の身、他人に簸弄せられたるを悟らず。人を颺風にし、我を糝糠にす。實に自ら待つ薄きのみならず、抑、亦學藝に負くこと多しといふべし。大丈夫豈此の如くなるべけんや。それ大海の百川を呑む、大も亦呑む、小も亦呑む、清も亦辭せず、濁も亦辭せず。日に黙々たり、洋々たり而して、漸く我が大を成し、徐に我が大を用ひ、日に活潑々たり、圓陀々たる大作用をなす。大賢の、人の言を受くる、またかくの如し。精雜密疎の説、毀譽褒貶の評、皆一齊に之

擊壤の歌

日出兮而作、日入兮而息、擊壤而飲、耕田而食。帝力奚有於我。(帝王世紀) 舜の詩

をして日に進ましむるあらんことを願はざる無し。古人まことにかくの如し。則ち堯舜の聖、批評を如何ともするなしといへど、批評も亦堯舜の聖を如何ともするなし。擊壤の歌は誰か堯の徳を傷つくるものとなさん。舜の詩猶存すれども、誹謗の木の文は今何處にかある。是の故に、學藝に志ある者は能く外に受くる大賢の如くなる能はずとも、勉めて己に克つて人に受くべし。饒舌の分疏は老婆の醜態、逆耳の言に聽かざるは好漢にあらじ。縦令、滿面の垢辱、堪へんと欲するに堪ふる能はず、筋張り、血湧き、劔を抜いて直ちに報いんと欲するに至るとも、亦先づ牙關を咬定して、隱忍し、頭を垂れ、心を虚しくする工夫の裏より一天地を拓き得て、笑つて、立つて、謝して、牛溲馬勃を我が藥籠中に收むるが如くならんを期す

べし。之を大丈夫の受の覺悟といふ。

人貶すれば便ち受けずして胡言亂説し、人讚すれば便ち默受して欣々たる如きは、閨閣の兒女に在つては咎むべくもなし、學藝の士に在つては甚だ鄙しむべしとす。古に曰く、峻谷に入るものは當に葛藟を攀ぢて以て顛墜を免るべし、時俗に處るものは當に道義に據りて而して後以て自立するを得んと。學藝に遊ぶものは當に反求の功に頼るべし、漸く深造するあらん。唯反求の功に頼る、則ち揚げらるゝも自滿せず、抑へらるれば、愈奮ふに足らん。

徐子曰く、今それ身を立つる、人の譽むる所とならずして、人の謗る所となるものは、未だ善をなす理を盡くさざればなり。善をなす理を盡くすものは將に舜の若くならんとす。舜と同じか

徐子 字は偉長 後漢の末魏の初の人 中論の著者

五十にして
蘧伯玉年^三至^五
十^二而知^三四十九
年^一之非。
(淮南子)

らずといへども、それ敢へてこれを誇るものあらんや。故に語に稱す、寒を救ふは裘を重ねるに若くはなし、誇を止むるは身を修むるに如くはなし。』と。善いかな言や、能く大丈夫の覺悟を説けりといふべし。古人五十にして四十九を非とす。今、我、昨の我を是として後の我に望むなくんば、我の死するや久しからざらん。

大丈夫たらん者は當に受發の二途に於て、大丈夫の覺悟を以て立ち、而して學藝に盡くすあるべし。子思曰く、能く其の心に勝つ、人に勝つにおいて何かあらん。能く其の心に勝たず、人に勝つを如何せん。』と。爲すところありて美とせられず、内に求めずして人に責むる、其の情は憫むべし、其の爲は悲しむべし。我豈人の勝つことを好むを陋とするのみならんや、我また實にこれ

を愧づ。倣はんかな海や、百川其れ海を如何せん。

(露伴全集 調言)

九 國語の愛護

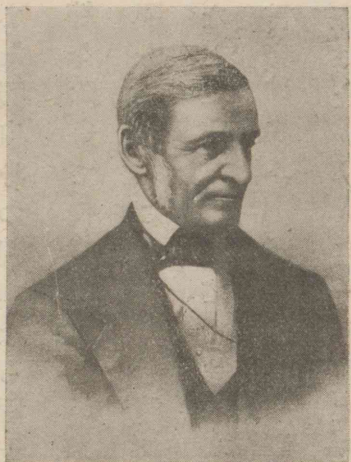
五十嵐 力

國語の愛護
小學國語讀本卷
九、二八「國語
の力」参照
五十嵐 力
國文學者
文學博士
早稻田大學教授
明治七年(三五四)
山形縣生

こゝに獨立した一つの國があつて、その國をそのまゝ維持して行き、或は更に進んで一層立派なものに仕上げて行くについては、國民の愛護して行かなければならないものが澤山あるかと考へます。先づ第一に國體といふものがありませう。それから國民が祖先から傳へられた淳風美俗といふものがありませう。或は建築、繪畫、彫刻その他の藝術といふものもありませう。或は山水その他の自然美もありませう。或はその國の特産といふ天産物もありませう。その他いろいろのものがありませ

うが、國語といふものゝ吾々が先祖から繼承して、思想傳通の機關として調法して居る國語といふものも國民の愛護しなければならぬ最も大切なものの一つであるかと考へます。人によつては、格別國語に重きを置かずして、吾々の重んずべきものは思想である、實體、實質である、言葉などいふものは、思想、實體を現す一つの符牒形式ではないか、一種の表現方便ではないか、表現の形式や符牒ぐらゐにつまらない骨折をするのは愚なことであるといふやうなことを考へて居るかも知れません。またさういふ人が實際可なり多くあるやうに思はれます。しかしながら、これは片手落の理窟といふもので、事實においては表現即ち實體である、言葉即ち實物である、思想であるといつてもよいかと、私は思ひます。少くとも表現が實體の半分である

エマーソン
アメリカの文學
者
思想家
(西曆一八〇一—一八
七二)



とぐらゐは考へることが出来ませう。アメリカの有名な詩人にして哲學者なるエマーソンは、人といふものは、たゞ半分だけが自分で、他の半分は自分の表現だ、自分の現れたもの、或は現したものだ。といふことをいつてをります。佛者は一心萬法とも申して居ります。いかにも一心の中に萬法が含まれて居りませう。けれども萬法を離れて一心を考へることは出来ませう。假に自分といふものについて考へて見ますと、吾々が人から「汝は何ものぞ」と問はれた時に、先づ思ひ浮かべるものは、自分の現れたものでありませう。そして自分の姓名、職業、資

格・住所・事業等を以て答へるでありませう。自分自身の現れなる若しくは自分が現したる姓名・服装・住宅・庭園・言語・文章・藝術等を除外して、何處に名々個々の「我」といふものがありませうか。また國自身の現れなる國土・山川・都會・田舎・諸制度・諸設備・諸藝術等を除いて、何處に「國」といふものがありませうか。世の中には異を樹つることを好む詭辯者があつて、よく表現の様式や外形などに支配されてたまるものか、衣服は寒暑が凌げれば澤山だ、言葉は思ふ事が言へれば澤山だなどと申しますが、世の中の實際は、なか／＼さう手軽に行くものではありません。めかしやは自然に洒落れた服装をし、しまりやは自然に質素な服装をする。これが世間の常態で、そしてそれ／＼の服装の上に、二者の人物・心持がすつかり現れて來るのでせう。美髪家は髪をき

伊藤仁齋
古學派の儒者
京都堀川住
寶永二年(三六七)
卒
年七十九
贈正四位
芭蕉
松尾宗房
俳諧正風の祖
伊賀上野生
元祿七年(三三四)
歿
年五十一
アッシヤ
伊太利の中部ベ
ルギヤ州の小都
會
フランス
伊太利の高僧
謙遜卑下を理想
とし小鳥にも説
教し蚯蚓にも祈
を捧げたといふ
(西曆二八一三
六)

れいに調へることに憂身をやつし、蓬髪家は髪をぼう／＼と亂すことに苦心する。伊藤仁齋は井戸浚の場合にも袴を着けずには居られず、芭蕉は笠一蓋、杖一本でなければ心が落ちつかず、アッシヤのフランスは敝衣に繩の帯を締めなければ安んじません。そしてその袴姿・笠杖姿・繩帶姿に、彼等名々の人物が、鮮かに著しく、そして最も的確に現れて居るのです。かう考へると、表現即ち實體といはれぬまでも、表現即ち實體の半ばとぐらゐは、いつて差支なからうと思ひます。表現はかやうに意味の深いものです。そしてこれを個人について見ると、その表現には、顔つき・容貌・恰好・服装・歩きつき・話振など、いろ／＼ありませうが、特に言葉について見ると、言葉はその人の爲人を現す所以のものであります。その人の人格・嗜好を

現し、又その人の過去をも、現在をも、時としては未來をも現すものであります。従つて言葉は自分に對し、又他人に對して深く大いなる影響を及すもので、時には言葉の方便によつて、人を向上せしめることも出来ませう。穢らしい着物を着て寢轉んで居ると、自分の性格までが卑しくなるやうに思はれるが、羽織袴を着けて端然と坐つてゐると、自分の品位が高くなつたやうに思はれ、自然に身を慎むやうな心持にもなるではありませんか。言葉も同じことで、その表現上の用意嗜好次第で、自分の人間としての品格を高め、立派な運命を開拓することも出来ませう。又これによつて人に好感を與へ、延いては社會を利し、一國文化の向上に貢獻することも出来ませう。曹洞宗の開祖道元禪師は、愛語能く回天の力あることを學すべきなり。」と説いて居られ

道元

久我通親の子
曹洞宗の開祖
越前永平寺の開
山
建長五年（九三）
寂
年五十四
勅諡承陽大師

ますが、私は禪師のこの簡単な一句の中に、言葉の靈力が強く道破されてあることを見出します。而して殊に教育家の言語使用に關する理想境が味はひ深く道破されてあることを悦びます。（國語の愛護）

一〇 教育的思慕

小西重直

教育は色々の文化價值と關係ある以上、それらの體驗がそれぞれ教育的に取扱はれることによつて、教育的體驗の内容となることが出来る。併し教育的體驗はこれらの文化的體驗の寄せ集めではない。教育的體驗の中より、これらの文化的體驗の具體的なるものすべてを除き去つても、教育的體驗の本質は依然として残つてゐる。それは思慕の情意である、渴仰である、憧

小西重直

教育學者
文學博士
京都帝國大學名
譽教授
明治八年（一五五）
山形縣生

プラトー
希臘の大學者
ソクラテスの高
弟
アリストートル
の師
(西曆前三七〇前
三四七)



プラトー

憬である。自己の現在に不完全不十分を感じて、より完全なものをつかまうとする思慕の情意である。單なる心理的な自發的活動でなく、價值實現への自發的活動である。併し能く考へて見ると、プラトーが言つたやうに、哲學は思慕であり、一般に文化の創造は思慕である。絶對の世界、完全な世界の可能を信じて、これを思慕することなしには哲學も起らない、一切の文化も創造されない。この意味に於て教育的體驗の本質は哲學や一切文化の創造力と同一であるとも言はれる。即ち教育的體驗の本質は文化的思慕であるとも言はれる。

併しました、もう一度ふりかへつて考へて見ると、教育そのものの世界は唯一人の孤立の世界ではない。各個人々々が文化的思慕を抱いて努力して居つても、それを直ちに教育の世界と言ふことは出来ない。佛の世界を自分の内面に啓示するには、各人の佛性が釋迦の人格に觸れねばならない。神の恩寵に浴するには基督の胸にすがらなければならぬ。人格は人格と觸れ合つて始めて伸びて行き、魂は魂に燃えついて始めて進展する。文化的思慕は人類に根源的な超主觀性の作用であるが、これが啓培發展には人格間の交流を必要とする。人格の内面的交渉、その相互作用なくしては、文化的思慕は冷たき冬の空にさまよふ雛のやうなものである。暖き人格の懷に抱かれなければ凍死するより外はない。

法華經

妙法蓮華經
一部八軸二十八品
姚秦の鳩摩羅什譯
釋迦が晩年に中印度の摩揭陀國の王舍城近くの靈鷲山で大乘佛教の極意を説かれたもの

プラトニーに於てはエロス即ち思慕神の父はポロスといふ豊富神であり、母はペニヤといふ窮乏神であり、苦心して働かなければならぬ所の勤勞神であつた。エロスはその父と母との性を受けついで、一方には不完全や窮乏を感じ、他方には美しい、正しい、完全な世界、豊富な世界を憧憬し、イデヤの理想を思慕するのである。思慕に於て自己の創造的な永遠の生命を見出すのである。

この譬は子が親を慕ふやうなものである。親の心を忘れずに、これを自己の中に生かさうとする子心である。私はこれを文化的思慕と名づける。これは實に教育的體驗に於ける骨でもあり、神経系統でもある。併しその血や肉にも比すべきもの、教育的體驗の生命ともいふべきものは、法華經の信解品に解かれ

信解品

法華經の第四品
須菩提ら四人が釋迦の本意を知つて歡喜に堪へず譬喩を以て感激の情を述べたもの

である、長者と窮子の親心と子心との結合である。私はこれを教育的思慕と名づけたのである。

昔印度に一人の長者があつた。金銀、瑠璃その他の寶玉を山のやうに所有し、象や馬や牛、羊、車などを澤山にもつて居り、廣く他國と取引をなし、商人顧客は到る處に市をなし、多くの人々からは敬慕圍繞され、常に王者に愛されて居る富豪であつた。

この長者の一人子が、どうしたわけか、幼少のころより父の家を去つて、村から村へ、國から國へと流離漂浪して食を求めて、はや已に五十年を経過した。困窮益甚だしく、遂に親が戀しくなり、知らず識らず本國の方に向かつて來た。長者なる父はまた老朽して益、その子を思ひ、この倉庫の寶物を誰に讓るべき、是非自分の子を探し出して、これを讓りたいといふので、諸處探し廻つ

筆蹟

妙法蓮華經信解
品第四
ソノ時慧命須菩
提・摩訶迦葉・摩訶
目犍連ハ佛ニ從
ヒテ聞ク所ノ未
曾有ノ法ト世尊
ガ舍利弗ニ阿耨
多羅三藐三菩提
ノ記ヲ授クルト
ニ希有ノ心ヲ發
シ歡喜踊躍ス

た末、或都市に止つて住んで居つた。然るに丁度窮子も偶然この都市にさまよひ來り、日稼をしながら、父の家とも知らずに、父の家の門前に立つたのである。父なる長者は、獅子の皮の椅子に腰を掛け、

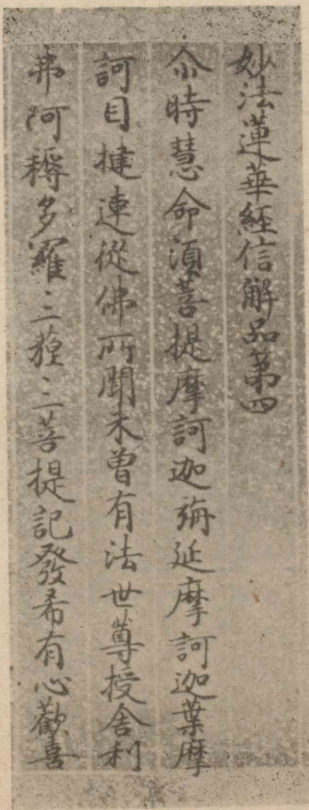
從者に圍繞

されてゐる

有様なかな

か威徳が高

く、窮子の目には國王でもあるかのやうに見えて、これは大變な處に來たといふので驚いて逃出した。すると長者は遙かにこれを見つけて、自分の子であることを知り、召使に命じてこれを捕へさせたが、窮子は益々驚き悶えて、地上に倒れるといふ始末。



品解信經華法
(經納家平社神島嚴)

そこで父なる長者は方便を用ひ、その場はその儘にして窮子の欲するまゝに解放し、後に召使をして懇切に説きさとさしめた。窮子はそれではといふので、父とも知らずに長者の家へ來て、大小便の掃除人夫となり、二十年の永い間汚物掃除をやつて居つたのである。その間に兩人の心も自然に理解され合つたので、長者は寶物庫の監督をその子に命じたが、長者はいよゝゝその臨終に迫つたとき、國王・貴族・親族などを招待し、その面前に於て一切の寶物や財産をその子に譲り渡したのである。

この譬話の中の長者は即ち釋尊で、窮子は即ち我々衆生であらう。衆生は數十年も煩惱の迷界に漂浪し、佛の教を聽かうとしなかつたが、遂には一念の佛性が芽生え、佛の世界が戀しくなり又佛の方ではその迷子を探し出だして、是非これを發心させ

たいものであるといふ切なる慈悲の姿である。親は子を思ひ、子は親を慕ふといふ親子相思の思慕である。法の世界は貴い文化の世界であるが、その中に必然的に衆生濟度の念願が含まれて居るのである。

私はこの譬話に於ける親子相互の思慕、親子の人格、親子の魂の内面交流が即ち教育的思慕といふものであつて、教育的體驗の本質はこの教育的思慕を地盤として文化的思慕を深めて行く所に見出だされるものであると思ふのである。

教育的思慕は人格を通しての文化への努力であつて、必ず文化的思慕を含むものである。又文化的思慕は文化の具體的構成實現に於ては教育的思慕に依らなければならぬ。のみならず文化そのものには發展が豫想され、發展には教育的思慕は不

可缺な契機である。

プラトールも亦、文化的思慕の實現や發展に、私の言ふ教育的思慕の必要なことを説いて居る。人は智や節度や正義などの諸徳を精神の内奥に抱持してゐる。相當の年配となれば、これを表出しようとして、相手を求める。そして素質の美しい貴い相手を見出せば、これを教育し、これを同化しようとする。

かくの如くにしてこの兩者は一層親密な内面的友情感の結合を體驗するのである。

プラトールの饗宴篇にありては、主としては文化的思慕が力説され、法華經にありては、親子相思の教育的思慕が生き／＼と説かれて居る。しかも饗宴篇においても、法華經においても、文化的思慕と教育的思慕とは全く不可分のものとなつて居るのであ

饗宴篇

プラトールの對話
篇三十餘篇の一

る。
教育する人の側に於ては、教育される人の文化的思慕を強めたい、深めたいといふ熱烈な教育的思慕がある。教育される人の人格を價值的に向上させたいといふ強い純な教育的思慕がなくしてはならない。而も教育される人の側に於ては、この思慕に感應するだけの人間性が動き出で、わけても他我を通して自我を高め深めようとする自發性が豫想される。「生活は陶冶す」といふペスタロッチの貴い濫い言葉が思ひ出される。感謝や敬愛や信頼などを基調とする人格的接觸を通して、理念への思慕は深められる。教育する人と教育される人が教育的思慕によりて結合し、互に文化的思慕を抱いてイデヤの前に祈を捧げる場合には、両者は全く無差別である。両者は共にイデヤの影

であり、共に神の子である。この時初めて教育する人は自己を教育し、また人を教育するのである。兩者の差別は「普遍」よりの洗禮によりて拭ひ去られ、兩者は「普遍」を通して融合するのである。この時こそ吾々は實に教育的體驗の本質を直接に内面的に經驗するものである。(教育の本質觀)

國文學史

序説

もろくの藝術は同じくこれ思想感情の反映なり。中にも文學は言語・文字を以て表現の材料とするが故に、他の藝術即ち音響による音楽、色彩・線條・形體による繪畫・彫刻・建築・肢體の運動による舞踊、さてはこれらを綜合せる演劇等に比して最もその永續性と普及性とに富めり。是、文學史が藝術史上特に重要なる地位を占むる所以なり。苟も國民文化の由來を討ね、將來その理想的發展を遂げしめんには、國文學史によりて我が祖先の精

参照(一)
卷七、二 國語と
國民性
卷九、二 國文學
の精神
本卷、九 國語の
愛護

神生活を味はひ我が國民性の特色を研究せざるべからず。今左に國文學史の大要を説かん。

一 上古の文學

第一 祝詞

上古の祭祀は即ち政治なり。故に政を訓じて「まつりごと」といふ。敬神崇祖の民族が皇室を中心として祭祀の庭に集り、祖先の勳業をしぬび、よりて以て團結せるは即ち我が建國の體裁なり。この時未だ文字なし。必ず口々に傳誦せられたる詩的美辭ありてこの祭祀に伴なひしならん。壽詞よじことといひ、祝詞のりことといふもの即ち是なり。

祝詞は、天皇即ち現神の命令によりて神祇に白す詞にして、常に

参照(二)
卷七、一 明淨直
道徳
卷三、六 祭祀と

参照(三)
卷十七 上古の
詩歌

國家の安穩、國民の幸福をねぎ求むるを以て主眼とす。國民が現世の福祉を求め、清淨を愛する風は、皆祝詞の中に之を認むべく、支那・印度の文明の感化未だあらはれざる上代の國民思想は明らかに我が祝詞式の祝詞にあらはれたりといふべし。祝詞は美文辭上より祝詞を見んか。その語彙の数は甚だ多からず。「常磐に堅磐に」「祓へ給へ、清め給へ」の如く對語を連用すること多し。こは單語のみならず、句に於ても亦然り。「朝には御門を開き、夕べには御門を閉て」「みかのへたかしり、みかのはらみてならべ」の類是なり。かく同一音同一語を反復するは、一面に於て單調に陥るを防ぐと同時に、又自ら莊重大の風を添ふる所以なりといふべし。

第二 歌謠

参照(四)
卷十六 忍坂の
大室屋
卷十七 上古の
詩歌

参照(五)
卷八、七 浦島子
卷十二 寧樂の
句
卷十三 歌の調
子
卷十七 上古の
詩歌

上代の歌謠はその形式未だ一定せず。一句の語數も定まりなく、長歌、短歌の別もなし。唯長短句を錯綜せしめ、疊句、對句を列ねて聲調をよくするのみ。その内容は極めて單簡にして、物に觸れ、事に感じて纔かに直覺的情緒を述べたる者に過ぎず。然れども、自然と人とを結合することは夙く已にこゝにあらはる。敵軍の來襲するを雁の田に下るといひ、戰亂の治るを雨の歇むに喩ふる類、皆人事を以て自然に喩へたるものなり。かくて上代の歌謠は個人的抒情詩として、祝詞は民族的祭神の詞、寧ろ敍事詩として、國民最古の詩的產物たり。支那文化の影響の未だ及ばざりし太古國民の文學として、興味之最も深きを覺ゆ。
(五) 萬葉集は短歌四千百餘首、長歌二百六十餘首、旋頭歌六十餘首の大歌集なり。萬葉時代、委しくいへば、藤原朝即ち持統・文武兩天

皇の朝以後、和歌の形式の非常に擴大し、長歌の發達せしは顯著なる事實とす。中にも柿本人麿の作歌には長篇頗る多く、その歌雄渾壯大なり。上代の文學としての祝詞は古來の舊辭を敍し、傳説を述べて數百言を陳ねたるに、咄嗟の間に成るを主とせる歌謠は概ね五十言に滿たず。今や人麿は民衆共同の祝詞の形式を以て之を個人の抒情詩に應用せしなり。然れども人麿が功績は單にその形式を擴大せしのみにはあらず、實は祝詞中に含有せる敬神崇祖の精神を抒情詩として歌ひ出せるに存す。山部赤人は人麿に比すれば概して詩形の簡單を喜び、歌中の句法も亦短き文に分割し得べく、人麿の如く一瀉千里の勢なし。その長は瀟洒にあり、簡潔にあり。富士山の歌の如き、雲・雪・山・河等の語を用ひたるのみにて、高潔崇高の風韻を帶ぶること富士

山そのものに彷彿たり。これ亦祝詞の神を傳へたるもの。山上憶良に至りては、支那に遊べることあり、漢學に通じ、佛説を喜ぶ。詠ずる所皆支那思想、印度思想に基づき、歌の序としては、漢文の四六文を用ひ、儒佛の影響最も顯著なり。

第三 歴史

大化の改新、支那文化の輸入は自ら國運の進展を促し、茲に修史の事業は起り、地誌の編纂は企てられたり。その古事記、日本書紀は傳へて今日に至りたれども、風土記は多く亡佚せり。古事記は神代より推古天皇までの歴史にして、稗田阿禮が舊辭を誦せるを太安麿等が筆記せるものなりといふ。従つてその文は大體古くより口々に言傳へたるまゝに寫せるものなるべく、日本第一の古典なり。就中神代の卷は神話、傳説、歌謠等に富み、

參照(六)
卷七三 稻葉の
素苑
卷八一六 兄宇迦
斯弟宇迦斯
卷十五 天石屋
戸
同六 忍坂の大
室屋

最も趣味多し。日本書紀は漢文體の國史にして、古事記と共に貴重なる文獻なり。

太古より奈良朝に至るまでは、その間の年代頗る長く、一般文化の發達、之を祖先建國の昔に比ぶれば、亦實に霄壤の差ありしなるべし。然れども未だ國字を有するに至らざりき。今總じて之を上古と稱す。(芳賀矢一著國文學歴代選に據る)

二 平安時代の文學

第一 和歌

平安時代は支那の文化の次第に我が文化と融合したる時代にして、我が特有の文化も亦次第に發展の氣運を見たる時代なりとす。所謂和魂漢才の語は實にこの時代の造語なり。就中文

學上に最大の關係を有するは假名文字の製作なり。

奈良時代に於ては、今日の如き假名の製作なかりしが、この時代に至り、或は漢字を草體にし、或はその扁旁を割きて假名となし、音標文字として用ひたるより、漢文・漢詩の製作は朝廷の科擧に必要なる科目たりしに關らず、一面に於て國語を以て記せる純國文學の發生を促し來り、當時の建築・彫刻・繪畫等が日本式の發達をなしたると同じく、文學も亦特殊の發達をなして、支那の強大なる文化に壓伏せられざりし我が國民の元氣を發揮せり。假名にて一般に國語を寫すに至りしは清和天皇・文德天皇以後ならんか。韻文としての和歌、散文としての物語は相前後して著しき發達をなし、平安朝の文學界を燦爛たらしめたり。而して和歌の發達と之に對する賞翫とは、あらゆる文學の根柢をな

參照(一)
卷七、四 野邊の
若菜

せるが如し。
延喜の朝、紀貫之凡河内躬恆等勅を奉じて萬葉集以後の歌をえらぶ。古今集(一)是なり。古今の歌を取りて萬葉のに比すれば、その内容を増加せること最も著し。是、佛教思想と六朝詩賦の思想とを短歌中に移植したればなり。造句の法も、古今に至りては修辭上の進歩著しく、譬喩・縁語・懸詞等最も巧緻に使用せらる。萬葉集は初心なる趣ありて簡古の味に富み、古今集は巧緻の境に進みて勁健の趣なし。自然と人生との融合はこの時代に至りて全く完成し、春花・秋葉・雪月の美、歌に詠ずべき題目は多くこの時代に確定せられ、春の鶯、夏の杜鵑、秋の蟲の音、鹿の聲、四時の景物に伴なふ禽獸もまたおのづから一定し、春の花の盛には人生の樂しき朝をおもひ、萩の上の露にははかなく消ゆる死の運

命を悲しむ。和歌の約束悉くこゝに成立して、後の文學は皆之に則るに至れり。

第二 日記

貫之は和歌に於て久しく後世の模楷たりしのみならず、國文を以て始めて和歌序を作り、勅撰集序を記し、又日記をもものし、以て國文をして歌文と並行する地位に立たしむるに至れり。是、貫之の國文學に於ける殊功といふべし。就中(二)土佐日記は、土佐守の任果てて京に歸りし海路の日記にして、自ら婦人に託して之を記せり、その文體簡樸にして輕妙、往々諧謔を交ふ。日記の巨擘と稱せらる。

參照(二)
卷九、八 土佐日
記鈔

當時男子の日記は漢文にて記し、官邊の事歴、日常交際上の事柄等を多く記入せるに對し、深窓の女子は國文を以て日記をももの

道綱の母
 藤原倫寧の女
 攝政藤原兼家の
 室
 右大将藤原道綱
 の母
 和泉式部
 歌人大江雅致の
 女
 和泉守橘道貞の
 室
 夫の歿してのち
 藤原保昌の室と
 なつた
 菅原孝標の女
 孝標は道眞の玄
 孫
 孝標の室は倫寧
 の女即ち道綱の
 母の妹

したり。而してその記事は主として閨閣の事に關し、家庭の間に限られたるは當代の事實にして、花鳥風月の媒介となれる和歌はその波瀾に際して好箇の記念となり、讀者の感情を動かすに足れり。蜻蛉日記は右大将道綱の母の日記にして文辭精鍊見るべし。和泉式部の日記は才華は見えたれど輕佻浮華の本性あらはれたり。紫式部日記は中宮の侍女として宮仕の様を寫せるものにして、容貌・言語より衣服・調度の末に至るまで、流石に機敏なる觀察力を認むべし。更級日記は菅原孝標の女の筆に成り、紀行文あり、抒情の文あり、夢を敘し、傳説を敘す、また一種の日記なり。

第三 物語

この時代に於ける和歌の流行はまづ和歌に關する物語を生め

参照(三)
 卷七、五 吾妻下

り。伊勢物語は和歌についての傳説集といふべく、在五中將の初冠より書起して、その今はのときの歌を以て筆を收む。書中のむかし男は業平のことと解せられ、その歌も悉く業平の作と見做さるれども、業平以外の作者の歌も加れり。要するに人口に膾炙せる今古の名歌を基礎として、その由來を説き、之に背景を點出したるものといふべく、之を名づけて歌物語と稱するを得べし。伊勢の後に、同じく名歌に關する説話を收めたる大和物語あり。伊勢物語と相並びて後の歌人に尊敬せられたり。竹取物語は物語の祖と稱せらるれども、後の物語類とはその性質を異にし、月中女子の傳説を骨子とす。その説話の一段毎に言語の滑稽を以て結び、之に和歌を添加せるは、尙歌物語の性質を有せりといふべし。うつぼ物語・落窪物語等これについて出

参照(四)
 卷九、七 かぐや
 姫

參照(五)
卷九、二須磨

で、遂に平安朝物語の白眉として源氏物語は生まれたり。
源氏物語五十三帖は紫式部の著す所なり。前篇は光源氏を主人公としてその得意の状を寫し、後篇の宇治十帖は薰大將を主人公としてその失意の様を敘す。全篇の脚色整然として紊れず、主人公を圍繞せる各種の女性の性格も明瞭に發揮せられ、局面の變化も亦頗る多し。蓋し源氏の大作家たる所以は、人物の描寫が活躍せると共に、自然を描ける文辭の絢爛精妙なる點にあり。人情の描寫の後には必ず自然の背景を添ふ。人事と自然とを融合せる詩的思想はこゝに至りて最大の發達をなせるなり。その半面は和歌の趣味にして、他の文には必ず歌の景情を含めり。若しそれ、散文としての外形より見んか、純國語として最も發達せる種々の形式を發見し得べし。故に古今集が和歌

の模範文學たるが如く、源氏物語は國文として後世の模範文學となれり。源氏の用語は、恐らくは當時の上流社會貴婦人の通用語なりしなるべし。母音多く、敬語に富める國語の一層進歩せるものにして、にをが等の接續的助辭を以ていくつとなくその句を連接しゆき、一文にして一頁に互るもの亦稀有に非ず。嫋々として風に靡く野萩の花の如く、優雅艷麗、裳唐衣裾帶長く垂れし當時の婦人の楚楚たる姿に似たるものあり。

第四 隨筆

源氏物語と相並びて國文の雙璧と稱へらるゝものは清少納言の枕草子なり。枕草子の妙はその隨筆たる點にあり。忽ちにして人事、忽ちにして自然、或は公事を評し、或は人物を品し、或は自己を誇り、或は皇后を褒め、閲讀の間多種の事件に遭遇して、殆

參照(六)
卷九、〇雪の山

ど應接に違あらざるなり。その變化、その錯綜、こゝに始めて全篇の妙味を成し來る。文章の妙味も亦句法の錯綜にあり。或は長句、或は短句、忽ちにして花をいひ、忽ちにして小兒に移り、又草花を點じ來り、再び人事に入り、忽ちにして今、忽ちにして昔、時と場所とを右往左往し、天地間の萬物、人事と自然とを問はず、種種雜多に、想像の到るかぎり捕捉し來る。その變化轉換の妙即ち人を魅するに足るなり。枕詞、懸詞の妙味は、元來人をして一事を思念せしめて忽ち他の事物に轉ぜしむるにあり。枕草子の文は即ちその手段の最も發達せるものなり。或事柄に執着固定せずして、一時に多方の興味を惹起す妙機を捕へ得たる所以は、即ちその文の輕妙洒脫の氣を帶ぶる所以なり。平安朝の世は平安の都の今を盛と榮えたる時にして、上流の紳

參照(七)
卷四、三
木
流泉啄

士は、詩歌に、音樂に、舞蹈に、風流閑雅の技を弄べり。その束帶の裾を曳きて頻繁なる年中行事に仕ふる様の如何に優美なりけん。それらの面影は各種物語の上に想見すべきなり。而も平安朝の上下の事情を見るべきものは、今昔物語に如くはなし。今昔物語は文學の作品といふべからざれども、印度、支那、日本に互りて種々の奇談雜話を類聚したるを以て、嘗にわが國の傳説を知る上に於ての珍書たるのみならず、眞に世界傳説研究者に取りて至寶といふべし。抑、儒佛二教が我が國民の思想界を一變せしめたるは言ふまでもなけれど、之と共に各種の傳説、童話も亦輸入せられ、僅かに其の人と處との名を改めて日本化せるもの甚だ少からず。凡そ我が國佛教渡來以前には因果應報の談もなく、輪廻轉生の説もなく、禽獸妖怪の話もなかりき。今昔

は實に國文を以てこれらの多數の説話を集め得たるものなり。鎌倉以後に至つて、これらの説話は皆文學の中に吸収せられ、一面より見れば大いに我が文學をして豊富ならしめたるもの、今昔の中にその淵源を探り得べし。

第五 歴史

平安初期の歌物語一變して小説的物語となり、日記となり、再變して歴史物語を生ぜり。

榮華物語は全篇四十帖、村上天皇の月の宴に始まりて、堀河天皇の紫野の卷に終ると雖も、要は關白道長が一代の榮華を寫せるものなり。この書一名世繼物語と稱せしは、歴史物語といふにひとし。歴史と稱すといへども、宮廷の歴史なり、後宮の歴史なり。この點に於ては假構物語といくばくも異ならず。物語の名も

參照(八)
卷八、四 法成寺

亦ふさはしといふべし。

文學上の價值より見れば、大鏡は遙かに榮華の上にあり。大鏡は歴史として列傳體を取れり。而して藤氏の榮華を寫すは全く榮華に等し。雲林院の菩提講に來り合へる大宅世繼、夏山繁樹二人の老翁の談話として之を記し、間、傍聽者の意見を挿み、全體の構造の詩的なるは文學的の性質を存して正史のこちんしきところなし。その文の勁健にして筆端褒貶の意を含めるは、恐らくは男子の作なるべし。この二者は藤原氏時代の最後の文學として藤原氏時代の最後の榮華を寫せるものなり。之を要するに、平安時代は前後四百年に互り、古代文化の最も光彩ありし時代にして、江戸時代と共に我が國に於ける文學隆盛の二大時期とす。されど當時の文化は上流の社會に限られて

參照(九)
卷六、三 菅原の
大臣
卷八、三 藤原道
長

一般の社會に及ばず、事物の發達すべて貴族的傾向を帶び、第宅衣服等實用を離れて粉飾に過ぎ、輕快を重んぜずして綺麗を喜ぶ。従つて文學も、物語は深窓消閑の玩具、和歌は貴族交際の媒介として帝都上流の間に行はるゝのみ。下流の情想を寫したる作品は、殆ど世に出てざりき。(芳賀矢一著國文學歴史代選による)

三 鎌倉室町時代の文學

第一 軍記

源頼朝幕府を鎌倉に開きて、政體こゝに一變す。公卿は政權を失ふと共に意氣沮喪し、武人は兵事に勵めども文事に疎く、庶民は數度の戰亂に疲勞し困憊して生活に餘裕なし。従つて當代の文學に雄篇傑作の多からざりしは、已むを得ざる所なり。

當時専ら武家の祐筆となり參謀となりて文筆に従事したる者は僧侶にして、純文學の如きも多くは其の手に成れり。されば、この時代の文學に佛敎的傾向の存すること平安朝より甚だしく、到るところに無常輪廻の思想を見るは、一は僧侶の手に成れるがため、一は時勢の然らしめし所にして、實に當時の頻繁なる變亂は社會をして自ら厭世に傾かしめ、盛者必衰會者定離の觀念の深く人心の根柢に染みたること、また舊時の比にあらざりしを思ふべし。

當時漢學漸く衰へ、上流の士も多くは純粹なる漢文を書き得ず、こゝに和漢混淆の一種特別なる文體を生ぜり。和漢混淆體の大いに光彩を放ちたるは、源平争鬪の次第顛末を記したる軍記類なり。抑、源平二氏が盛衰の迅速なるや、これを見聞する者を

參照(一) 卷四三 鎮西八郎

參照(二)

卷六、四 光頼卿

の參内

卷七七

の戰

參照(三)

卷五、五

信連

卷六、七

屋島

卷七、八

重盛の

諫言

して、自ら一種悲壯の感に打たれざるを得ざらしむ。こゝに於てか軍記の作あり。その最初に出でたるものは保元平治の兩物語にして、共に簡勁を以て勝れたり。ついで出でたる平家物語は蓋し曲節を附して諷誦せんが爲に作られしものなるべく、縦に雄大悲壯なる戰記を以て貫き、横に哀憐優雅なる物語を錯綜して、其の間にまた幽玄奥妙の佛教趣味を點綴す。されば治承の春を名残に壽永の秋に西國さして落ちゆける夢よりもはかなき平家一門が榮枯盛衰の記述には、言々涙あり、句々同情あり、讀む者をして、讀誦一過、忽ち無常厭世の感を懷いて佛道に歸入せしめずんばやまざらんとす。その冒頭を、祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を現す。といふに起して、最後の卷には、建禮門院が後白河法皇への物語

參照(四) 卷四、三 鴨越

參照(五)

卷三、五

光

同、四

遷幸

雪

卷七、三

落花の

雪

參照(六) 卷四、七 十三夜

に、其の経過せる一生を六道に譬へたまへりといふに考へても、以て其の全豹を推すに足るべし。源平盛衰記は、平家物語の本とも謂ふべく、たゞその記事詳密にして、文章頗る華麗なるを異なりとするのみ。
(五) 太平記は平家物語に倣ひて作れる者にして、後醍醐天皇の御即位に筆を起し、爾後五十年間の戰亂の始末を記述す。中興の事業に多大の同情と尊敬とを捧げ、數多の忠孝節義の士の事蹟を點綴して、其の間に倫理的宗教的觀念を鼓吹せるを見る。文體は漢字を用ふること更に著しく、文脈亦漢文調を加へたり。
(六) 義經記會我物語の二書は個人に關する敘事詩と見るべく、一は源平武人中最も傳奇的生活をなせる義經を主人公とし、一は孝子復讐の嚆矢なる二孤を主人公とし、共に貞操人情を主とした

る物語を傳へたり。從來の軍記に比して一層平民文學に近づけるを認む。

第二 隨筆

軍記に先だちて、和漢混淆體の文を用ひて成功したるは蓋し方丈記なるべし。方丈記は鴨長明が源平の紛争絶え間なき世を厭ひて山城の日野に隱栖せることを記せる短篇にして、文辭の流暢を以て顯る。

紀行文には阿佛尼の十六夜日記あり、土佐日記の系統に屬す。

東關紀行海道記等あり、作者は詳かならず、國語漢文を混和し、古歌古句を引用するところ鎌倉文學の性質をあらはせり。

これらのものと稍、その趣を異にし、率直平易なる文體にて書けるものに十訓抄(九)古今著聞集(一〇)宇治拾遺物語あり。何れも平安朝

參照(七)

卷五、三 東路の旅

參照(八)

卷六、三 藝苑佳話

卷七、二 和通部用光

參照(九)

卷七、三 八幡太郎

參照(一〇)

卷二、六 五大童話(摘取)

卷六、二 雀

時代に出でたる今昔物語などに倣ひて古今の面白き事實を集めたるものなり。

參照(一一)

卷三、四 仁和寺

卷四、四 四時のあはれ

徒然草は兼好法師の作にて、その趣味を談じ、世態人情を説く間に著者が修得せる道德主義によりてよく皮相の虚飾を透して隠れたる社會の裏面を觀察し、爬羅剔抉、痛快にそが矛盾撞着のあるところを暴露せり。文章も亦暢達にして雅馴、交ふるに奇句警語の天外より落ち來るものを以てし、かの枕草子と併せて以て隨筆の雙美と稱せらる。

第三 歴史

歴史としては神皇正統記、増鏡等最も見るべし。神皇正統記は准后北畠親房の著にして、建武中興の業敗れて王道の衰頽せるを憤慨し、古の歴史に照らして皇統の正閏を論じ、三種の神器の

參照(一二)

卷五、三 秋霧

卷六、五 人臣の道

參照(三)

卷七八 承久の
役
卷八、一〇 實朝の
大臣

參照(四)

卷九、六 比良の
山風

在るところ、即ち名分の存するところなるを疾呼せるものなり。是、實に國文を以て綴れる議論文の權輿ともいふべく、婉曲なる字句のうち博大なる風格を藏して、堂々としてまた朗々たり。^(一三) 増鏡は大鏡に倣ひて、後鳥羽天皇の御即位より後醍醐天皇の隱岐より還幸せられしまで、凡そ百五十年間の事蹟を記述せり。記事客觀的にして、毫も著者の主張を交へず。文章亦流麗なり。

第四 和歌

和歌は其の初期に於て最も盛にして、元久二年には、後鳥羽上皇の勅により、藤原家隆等新古今和歌集を撰せり。延喜以降、和歌の勅撰實に八度に及びしが、就中古今と新古今と殊に勝れたり。^(一四) 新古今は其の名の示す如く、よく古今を改造して、加ふるに客觀的敘景の新調を以てし、別途に比較的圓滿なる發達を遂げしも

參照(五)

卷八、二 山家金
槐集鈔

參照(六)

卷八、三 西行論
大臣
卷八、一〇 實朝の
槐集鈔

二條良基

攝政太政大臣藤
原良基
元中五年(1044)
卒

年六十九

宗祇

飯尾氏
連歌師
元龜二年(1571)
寂

宗長

連歌師
駿河の人
花の下宗匠
天文元年(1532)
寂

のといふべく、句調流麗、その新奇なること前古無比と稱せらる。従つて當時有名なる歌人亦少からず。まづ俊成あり、西行あり、^(一五) 寂蓮あり。關白良經は天授の才を以て時流の歌を詠じ、將軍實朝は萬葉の古調を喜びて金槐集を成す。定家は俊成の子にして、家隆と共に名匠の譽一世に高く、前者が措辭の巧緻を喜べば、^(一六) 後者は最も暢達の調を尙べり。又和歌に代りて、連歌の興れるもこの時代のことなり。先に二條良基これを好み、勅撰に准じて菟玖波集を撰したりき。後に宗祇の出づるに及びて、その流行絶頂に達す。宗祇旅行を好みて歌才を養ひ、曾て定居なし。勅を奉じて新撰筑波集を撰す。海内風靡して斯道の宗と仰ぐ。門人に宗長・肖柏最も名ありき。戰國の世、文運いよゝゝ衰へ、都鄙の懸隔減じ、貴賤の階級壞れ、京

年八十五
肖柏
連歌師
堺の人
大永七年(三六七)
歿
年八十五

山本霞む
見渡せば山本霞
む水無瀬川ゆふ
べは秋となに思
ひけむ
(後鳥羽天皇)

師の貴族等が文學を獨占したる風の失はるゝや、連歌は武人消閑の具として用ひられ、漸く平民文學としての傾向を示すに至りぬ。

水無瀬三吟百韻のうち(連歌)

雪ながら山本霞むゆふべかな

宗祇

ゆく水遠く梅にほふ里

肖柏

河風にひとむら柳春みえて

宗長

舟さす音もしるきあけがた

宗祇

月やなほ霧わたる夜に残るらん

肖柏

霜おく野原秋はくれけり

宗長

第五 謠曲

室町幕府の世になりては、戦亂相繼ぎて隣戰遠攻に干戈相見え

ざる日とてはなし。一時小康を見たる義滿の代の如き、實は大風到らんとして暫く平穩を持する時の如きのみ。永享に嘉吉に一波は一波より甚だしく、應仁の亂に及びては遂に急潮突破して、風伯叫び、電將狂ひ、雷神轟く大混亂、京都を中心として天下をこの混沌溟濛の裡に漂はすこと前後百餘年、上下舉つてその堵に安んずることを得ず、怨嗟の聲うたゝ四方に滿ちぬ。艷麗なる百花は平和なる春にこそ咲誇れ、かくすさまじき亂離の秋にいかでか榮えん。されば文學の如き、全く度外に置かれて、毫も發達すべき餘裕を存せざりしなり。されど應仁の亂までは、流石に幕威尙地に墜ちず、殊に將軍義滿は、柔弱にして遊樂を好み、義政は戦亂に遭へりと雖も社會の辛酸を知らざるが如く、それ〴〵閑居を設けて、文雅風流を楽しめ

り。されば水墨の畫、香茶の技などの發達せしもこの時にして、能樂の勃興に伴ひて當代唯一の文學たる謠曲を生じたるも、實に此の時代なりとす。

(七)

謠曲は將軍義滿の時、世阿彌元清によりて殆ど大成せられたるものにして、その中には多く佛教の思想を含む。趣向は幽靈顯れて往事を語り、巡錫の途なる名僧知識の回向によりて、成佛するもの多きを占む。詞句は好んで古文辭を補綴すれども、皆よく諧和して水晶盤上球を轉ずる如き好調に富む。

能樂の餘興に狂言(八)といふものあり。その技能樂の嚴正なるに對して滑稽を旨とし、概して罪もなき失策談にて、中にも迂愚なる大名を主人公とせるもの多く、巧に人情の弱點を捕へて、誇張過大の脚色、よく人の頤を解かしむるものあり。その文は當時

參照(七)

卷四、八 夜討會

我

卷六、一六 橋辨慶

卷七、四 羽衣

卷七、一五 謠曲

世阿彌元清

謠曲の大成者

嘉吉三年(1101)

歿

年八十一

參照(八)

卷四、二 栗燒

の言語をその儘に寫せるものにして、率直愛すべし。之を要するに、この時代は多少特色ある文學を産せざりしにはあらざれども、上に平安朝を承けてその後殿たり、下に江戸時代を起すべき先驅たり、まづは兩盛時を繋ぐ連鎖たる時代と謂ふべし。(藤岡作太郎著日本文學史教科書に據る)

四 江戸時代の文學

江戸幕府の世は泰平打續きて、殆ど兵戈の動くを見ず、文化の進歩前古に比なし。學問藝術上下に弘通して、四民共にその澤を享け、文學の滋味も普く一般に味ははるゝに至れり。されど幕府の施設漸く成るに従うて、戰國の世に壞れかゝりし階級の制も更に立ち、従うて文學にも貴賤の別なきを得ず。上流の人は

詩歌を詠じ、下流は俳諧を遊び、彼は學問にわたるものを喜び、此は戯曲・小説の類を愛し、彼は古文を墨守して固陋に流れ、此は新作に傾倒して卑俗に陥る。學識あるものは新興の文學を賤しみ、新興の文學に就くものはみづから卑うして高尚なる趣味を解せず。かくて戯曲・小説の如きは戯作を以て目せられて、正當なる文學上の地位を得ること能はざりき。

江戸時代の前期は京阪を中心とせる文學にして、寛永に萌し、元祿をその盛時とす。所謂元祿文學なり。後期は江戸を中心とせる文學にして、寶曆・寛政を経て文化・文政をその絶頂とす。所謂大御所時代の繁昌は文學にもあらはれたるものなり。今、江戸時代の文學を左に概説せん。

第一 漢學

大御所時代
徳川十一代家齊
の時代

藤原惺窩

名は肅

元和五年(三三九)

卒

年五十九

贈正四位

林羅山

名は信勝

明曆三年(三三七)

卒

年七十五

贈正四位

中江藤樹

名は原

慶安元年(三〇八)

卒

年四十一

贈正四位

熊澤蕃山

名は伯繼

元祿四年(三五二)

卒

年七十五

贈正四位

鳳岡

林信篤

享保十七年(三三九)

卒

年八十九

木下順庵

抑、江戸時代に於て文學復興の魁たりしは漢學なり。されど、寛永の頃は打續きたる戦亂の後を受けて、未だ詩文に心を潛むべき餘裕なく、有識の士は寧ろ儒教によりて社會の秩序を恢復せんとしたり。かくて儒教の興隆に功ありしを藤原惺窩・林羅山とす。家康の京都にあるや、屢、惺窩を延いて經史を講ぜしめしが、多くは辭して出でず、門下の俊才羅山を薦む。これより羅山の子孫代々儒を以て幕府に仕ふ。この二人が奉ぜしは宋の朱熹の學なり。朱子學は實に惺窩・羅山出でてより大いに世に行はるゝに至れるなり。朱子學の外に、近江の人中江藤樹・明の王陽明の學を奉じて實踐躬行を勵み、近隣その徳に服して皆善に移れりといふ。熊澤蕃山これに學び、備前侯に仕へて治績あり。元祿時代に至るや、將軍綱吉漢學を好み、屢、儒者を集めて經義を

名は貞幹
元祿十一年(三
癸)卒
年七十八
贈正四位
參照(一)
卷一、三 おもひ
で
卷四、六 柳生宗
矩
參照(二)
卷一、四 立志
卷七、六 月は世
世の形見
伊藤仁齋
名は維積
寶永二年(三六五)
卒
年七十九
贈正四位
東涯
伊藤長胤
元文元年(三五〇)
卒
年六十七
贈從四位
荻生徂徠
字は茂卿
享保十三年(三
八)歿
年六十二

討論せしめ、又自ら經書を講じ、諸侯も競うて儒者を聘す。かくて漢學頗る熾に、學者一時に輩出す。林家には羅山の孫鳳岡幕府に信任せらる。木下順庵は京の人、後江戸に出づ。その學博通不偏を旨とし、門下に新井白石、室鳩巢等著名の士多し。殊に白石は學博く識高く、有益の著多く、行文犀利にして透徹せざる所なし。眞に古今を通じて稀なる文豪なり。伊藤仁齋京に起り、朱子學は孔孟の古意にあらずとして別に古學を立て、その子東涯博覽にしてよく父の學を祖述す。荻生徂徠江戸に在り、亦朱子學を駁して古文辭學を立て、仁齋父子と東西に對峙せり。

第二 國學

元祿時代に於て和漢の文學に大功ありしを水戸侯徳川光圀とす。明の遺臣朱舜水を聘して學を講ぜしめ、又彰考館を開きて

朱舜水
名は之璣
天和二年(三四二)
歿
年八十三
參照(三)
卷五、三 人の問
に答ふ
卷八、二 水戸學
の精神
下河邊長流
貞享三年(三四〇)
卒
年六十三
贈正五位
釋契沖
元祿十四年(三三六)
卒
年六十二
贈正四位
荷田春滿
元文元年(三五六)
卒
年六十九
贈正四位

大日本史を撰す。その學の重んずる所、大義名分を正すにありき。光圀身は幕府の近親、奉ずる所は支那の儒學なり。この境遇の桎梏を脱し、國體の存するところを明らかに自覺せる國民の指南車たらんとせる光圀亦偉なるかな。光圀又古典の研究に志あり。下河邊長流に託して萬葉集を註釋せしむ。長流は大和の人、歌文に通じ、中古以來の僻説を捨てて先人未發の見を立つ。不幸業を終へずして歿す。釋契沖その業を繼ぎ、萬葉代匠記を著す。契沖は攝津の人、僧籍にありて國文を好み、造詣至りて深く、識見世に絶す。奈良文學の眞價は契沖によりて闡明せられたるなり。

享保の頃、京に荷田春滿あり。國史、律令に通じ、古意を明らかにするを以て己が任とす。いはゆる國學として古典を究めて國體のあ

る所を學ぶは、この人に起れるなり。嘗て歌うて曰く、踏分けよ倭にはあらぬ唐鳥の跡を見るのみ人の道かはと、以てその學風を見るべし。幕末勤王攘夷の説の沸騰せるは、水戸學と國學との感化與りて力ありき。

賀茂眞淵は遠江の人、京に出てて春滿に學び、學成りて後、江戸に來りて講説し、田安宗武に仕へて厚遇せらる。その學は春滿に繼いでわが國固有の道を明らかにするにあり。謂へらく、昔、儒佛の教の傳はりしより古道これが爲に廢れぬ。故に古道を明らかめんとせば、外國の影響なくして人意の自然に出てたる古書を學ばざるべからず。その古書は萬葉集最も善しと。よりて深くこの書を究む。その研究、契沖に一步を進め、その説く所一世に影響せり。識見甚だ高しと雖も、詩文の才は寧ろ學問に勝

参照(四)
卷五、三春の心
田安宗武
八代將軍徳川吉宗の子
田安家の祖
明和六年(一七九八)
卒
年五十四

参照(五)
卷二、七本居翁の遺蹟
卷二、八おのが物まなび
卷三、四菅笠日記
卷四、七縣居大人の御諭し言

平田篤胤
天保十四年(一八四三)
卒
年六十八
贈正四位

れり。門下に高材の士多くして、これより國學の勢、天下を席卷するに至れり。

眞淵の門人多きが中に伊勢の本居宣長^(五)、最も名あり。宣長の學は一に古道を明らむるにあり。古道を知るには古事記最も貴ぶべしとして、その註釋に従事し、三十四年を経て業成る。即ち古事記傳にして、以てその深遠なる學と穩健なる見とを見るべく、實に契沖の萬葉代匠記とあはせて江戸時代國文學界の二大作たり。宣長なほ多くの著述あり。宣長の研究態度たるや博引旁搜盡くさざるはなく、具に諸説の異同を辨じ、これを歸納して始めて自家の結論に達す。故を以て論據堅實、識見超凡、洵に一代の大家たる概ありき。門流甚だ盛なりしが、歿後の弟子平田篤胤最も著る。篤胤は出羽の人。その意宣長より一步を進

めて古道を以て一の宗教とし、之を弘布して、儒佛の教を斥けんとするにあり。勤王攘夷の説はこれらの論によりて益、刺戟せられたり。

第三 和歌

加藤千蔭、村田春海は共に江戸の人、亦眞淵の門に出づ。學問は宣長の博きに比すべきにあらざれども、何れも文學に長じ、殊に歌道に於ては、所謂江戸派の代表者たり。二人の詠ずる所は、その師の如く萬葉調に非ずして、古今風に交ふるに新古今風を以てしたるもの、その優雅なる格調は、自ら江戸泰平の寛濶にして悠々たる趣を味ははしむ。當時、京の文壇に於て、香川景樹の歌道を一新せる功は特筆大書せざるべからず。景樹の歌論は、意は古の誠實なるに倣ひ、詞は今の通じ易きを取り、殊に聲調を重

加藤千蔭

文化五年(四六)

歿

年七十四

村田春海

文化八年(四七)

歿

年六十六

參照(六)

卷三、七神代の雪

參照(七)

卷六、三 小品三章

香川景樹

天保十四年(五〇)

三卒

年七十六

贈從五位

良寛

天保二年(四九)

寂

年七十五

井出曙覽

明治元年(五六)

卒

年五十七

贈正五位

大隈言道

明治元年(五六)

歿

年七十一

參照(八)

卷三、三 童心

參照(九)

卷三、三 世の中

四方赤良

太田南畝

蜀山人

文政六年(四三)

歿

年七十四

んずべしといふにあり。調とは人心の祕奥より流れ出づる悲喜の情の口に上り辭となりて、自ら音節を具するもの是なり。その派を桂園流といひ、大いに世に行はれたり。この他幕末の歌壇に最も異彩を放てるものは、越後の僧良寛、福井の井出曙覽、福岡の大隈言道等なり。これらの人は、從來諸派の類型を脱し、全く独自の歌境に立てり。その構想の洒落輕妙なる、その觀察の微細奇抜なる、その句法の斬新にして自由なる、正に一生涯を開けるものといふべし。

和歌の想の滑稽にして詞の卑俗なるものを狂歌といふ。滑稽趣味の歌は既に萬葉集にこれあり、それより往々これを詠ずるものあり。江戸時代に入りては、泰平の氣特にその振興を促し、寶曆前後より化政度にかけて狂歌師一時に輩出す。中にも四

参照(一〇)
卷五、二 牡丹
卷八、三 荒海

松永貞徳
承應二年(三三三)
歿

年七十八

参照(一一)

卷八、四 奥の細

道

卷八、五 野分の

芭蕉

卷九、四 幻住庵

の記

卷九、五 猿蓑鈔

北村季吟

松永貞徳の門人

湖月抄等の著者

寶永二年(三三五)

卒

年八十八

贈從四位

方赤良和漢學の根柢あり、最も滑稽の才に富み、戲謔口を衝いて出でたり。

第四 (一〇) 俳諧

江戸幕府の世に俳諧の興りて、連歌より獨立せるは、實に京の人松永貞徳の唱道によれり。されどその作なほ幼稚なり。この一派を古風と稱す。ついで西山宗因大阪に起り、舊格を打破して放縱なる一體を創む。之を談林風といひて、一時大に行はれたり。宗因は才氣縱横、辭藻口を衝いて發せりと雖も、内容は之に伴なふ能はざりき。要するに、古風と談林風とは平民文學として俳諧を廣めたるをその功とすべきのみ。

元祿に至り、革新の旗を翻して天下の俳風を一變したりしは、松尾芭蕉なり。芭蕉は伊賀の人、京に出て、北村季吟の門に古風

榎本其角
寶永四年(三三六)
歿
年五十六

服部嵐雪

寶永四年(三三七)

歿
年五十四

を學び、又流行を追うて談林風を弄ぶ。後江戸に來りて正風を起し、また東西に周遊してその風を擴む。詠ずるところ人事よりも自然に多く、幽玄清澹にして廣く雅俗にわたる。芭蕉の句は壯より老に及びて三たび變化せり。漢語を用ふること多く、絢爛の趣ありしはその初なり、花實併せ得んことを欲して苦心慘澹たりしはその中なり、切瑳琢磨の功を終へて成る所却つて平易に言ふべからざる味を有するに至れるはその終なり。されど一たび古池の響に得たる信仰は生涯を通じて變ぜず、よく俳諧をして李杜の詩、西行の和歌と比較して軒輊するところなきに至らしめたり。四方翕然として靡き、俳諧これより遍く都鄙に行はる。門人には豪放なる榎本其角、溫和なる服部嵐雪等俊秀の士諸國に多し。

與謝蕪村
天明三年(四四〇)
歿 年六十八

横井也有
天明三年(四四〇)
歿 年九十二
小林一茶
文政十年(四七七)
歿 年六十五
參照(二二)
卷五、八、百蟲譜
參照(二三)
卷三、三、幼兒

その後、風調漸く卑俗に流れしかば、天明の頃、これを慨して革新を唱ふるもの東西に起れるが中に、京の與謝蕪村その最たり。蕪村畫を善くし、粗放奇拔、自ら謂へらく「われに師なし、自然を以て師とす」と。かくて、畫、俳相俟ちてその才を發揮せり。蕪村好んで自然の景物を詠じ、漢詩の趣を傳へ、またよく歴史的事實を材料とす。芭蕉は靜寂の趣を得るを以て旨とせしが、蕪村は進んで活動の態を捉へんとし、人事の消息、時間の經過をも寫さんとせり。要するに蕪村はその句を活躍せしめ、又複雑ならしめたるなり。芭蕉と相並んで斯道の二聖とすべし。横井也有は尾張侯の臣、其の俳文は特に淡雅輕妙を以て聞ゆ。小林一茶は信濃の産、その句、表は飄逸粗野にして、裏に深刻なる生活苦と人間愛とを藏す。自ら別調なり。

柄井川柳
寛政二年(三四五)
歿 年七十三
參照(四)
卷四、三、案山子

天明のころ柄井川柳巧に人生の弱點を捕へ、これを落首卑近の句に仕立て、皮肉なる諷刺を試みたり。所謂川柳點是なり。亦これ江戸泰平の氣運に乗じたるものに外ならず。

第五 戯曲

參照(一五)
卷八、七、馬追三吉
卷八、八、近松と西鶴
竹田出雲
寶曆六年(四二六)
歿 年六十一
參照(一六)
卷六、三、寺子屋

戯曲は謠曲等より出で、江戸時代に至りて大いに發達せり。元祿の頃、近松門左衛門あり、京に住み、のち大阪に移り、盛に淨瑠璃を作る。淨瑠璃には時代物と世話物とあり。時代物はその舞臺を過去に取り、世話物は目前現在の出來事を仕組む。近松が全力を盡くししは時代物にして、その量も十の八を占む。されど今日不朽の價值ありと認めらるゝは寧ろその世話物にあり。寫す所、人情の祕奥を穿ち、才藻湧くが如く、行筆の自在なること行雲流水に似たり。ついで竹田出雲あり、文才は門左衛門に及

近松半二
天明三年(三四五)

卒
年九十七

參照(七)

卷二、二五 巡禮唄

參照(八)

卷八、六 借家大

將八、八 近松と

西鶴

井原西鶴

元祿六年(三三三)

歿
年五十二

曲亭馬琴

瀧澤解

嘉永元年(五〇〇)

卒
年八十二

贈從四位

參照(九)

卷二、二六 五大童

話(燕石雜志)

卷三、三 戲作三

味

卷三、三 芳流閣

ばずと雖も、趣向の變化に富めること却つて之に勝れり。今日世に行はるゝはその作に多し。^(七) 近松半二はまたその門に出づ。

第六 小説

小説は元祿の頃、京阪に榮えたり。^(八) 井原西鶴大阪に出でて數多の浮世草子を著し、從來の幼稚なる小説を一轉して、巧に世間の風俗、人情を寫せり。その文輕妙奇拔にして、法格に拘らず、社會の裏面を描きて微細を極む。殊に晩年、町人社會を寫せるものに至りては圓熟の境に入りたるもの如し。

文化・文政の頃に至り、江戸に作者輩出せり。中にも^(九)曲亭馬琴は學問該博にして文藻絢爛なり。椿説弓張月、里見八犬傳等、その作の人口に膾炙するもの多く、一篇出づる毎に、世人争うてこれを求む。その趣一に儒教によりて勸善懲惡を旨とせり。従つ

十返舎一九
天保二年(四九)

歿
年五十七か

式亭三馬

文政五年(四八)

歿
年四十八

て人物の類型的にして個性の發揮に乏しく、極端なる善惡の權化にして人間味を缺如せるが如きは避くべからざる短所なり。されどその結構の雄大にして變化に富み波瀾の重疊たるはその類稀なりと謂ふべし。このころ、滑稽小説に名を得たりしは江戸の十返舎一九、式亭三馬なりき。一九の膝栗毛は旅の恥を書きずて、三馬の浮世風呂、浮世床は化政の社會を直寫して苦笑せしむ。之を要するに、江戸時代ばかり、その量に於ても、その質に於ても、上下貴賤各種の階級に通じて、豊富なる文學を供給せるは前代に比なし。而して又その形式・内容共に先例の桎梏を脱し、直接に自然と人生とに應接して自由にその感想を述べ、以て能く明治文學を産み出すに至れり。藤岡作太郎著、新體日本文學史教科書に據る。

五 明治時代の文學

第一 小説

維新の偉業正に成りて開國の國は一たび定まるや、世間は西洋の物質的文明の輸入に急にして、和漢の學術技藝を顧みるに遑あらざりき。況や美術・文藝の如きは全く無用の長物とせられて、幾多の國寶は破棄せられ、無数の古典は廢紙となりぬ。此の間にあつて纔かに微光を發せしものは、獨り新聞紙なり。新聞紙の刊行は、これを西洋に學びしものにして、當初は専ら政治論の機關たり、實用功利の論に非ざれば、以て時代思潮に追隨するに足らずとなしたりき。されど普通教育の制度漸く國內に普くして、文學の知識が中流以下の社會に擴張せらるゝと共

に、新聞紙の經營者も亦是等の讀者に對して其の娛樂となるべき文藝の作物を供給せざるべからざるを知りぬ。かくて、幕末以降久しく失意の地にありし戲作者が所謂續き物と稱する合卷風の小説を紙上に掲げ初めしは、蓋し明治文學の萌芽なり。從來筆を政治論にのみ執りたりし人々も、此の種の文藝の人心に影響することの速かなるを認めて、或は英佛の政治小説を翻譯し、或は新に架空の脚色を立てて自家の主張を具體的に説明せんことを企てたり。佳人の奇遇・雪中梅・經國美談等は當時最も喧傳せられしものにして、慷慨激越の調時に青年者流を感奮興起せしむるものなきにあらざりしかど、その豪放粗大の文は未だ人情の機微に入らず、文學の眞諦を得たりといふに足らざりき。

佳人の奇遇
東海散士柴四朗
著
雪中梅
鐵腸末廣重恭著
經國美談
龍溪矢野文雄譯

硯友社
明治十八年尾崎
紅葉・山田美妙
齋・川上眉山等
の結んだ文學同
好の會

さもあれ、明治はすでに十七八年を経たり、西洋の學術も技藝も
稍、咀嚼せられたり。世の先覺者はかの徒に物質の皮相にのみ
腐心するの愚なるを悟りぬ。文藝、美術の評價も日に漸く高か
らんとせり。この勢に乗じて、坪内逍遙等が文學論の出づるあ
り、硯友社一派の新に旗幟を樹つるあり、在來の戯作者系の人々
もこれに呼應して起てり。こゝに謂はゆる才筆家にもあらず、
政論家にもあらず、熱誠なる態度を以て直ちに人生を描破せん
とする者は、將に踵を接して出でんとせるなり。
思ふに新文藝の勃興は半ば西洋文藝によりて啓發せられたり。
されども他の一半は我が國の古文學に淵源せるものなること
を忘るべからず。蓋し維新以來萌し來れる西洋文明謳歌主義
は此に其の極に達して、その反動たる國粹保存論は盛に唱道せ

参照(一)
卷三、三 鹽原
参照(二)
卷九、五 猿蓑鈔
卷十、八 大丈夫
の覺悟

られ、國語教育の獎勵、古文學の研究が隆昌を極めしはあたかも
この頃なりき。されど、新文藝の先達は、嘗に西洋の文學のみな
らず、我が國の古文學に回顧し、或は中古の文學に私淑するあり、
或は元祿文學に摸倣するあり。我が文壇の泰斗として新篇出
づる毎に洛陽の紙價を貴からしめし尾崎紅葉と幸田露伴とは
ともに西鶴を學びてその新文體を創めしものなりき。紅葉が
艷麗の致は才人の情緒を寫すに長じ、露伴が遒勁の調は巧に男
兒の意氣を描きぬ。されど、その題材は、稍、單調なりき。良久し
うして世間はその反復に倦みぬ。乃ち變化を求めて、或は探偵
小説、冒險小説、俠客小説等の複雑なる脚色に喙采し、或は慘澹た
る事件を敘したる所謂觀念小説、悲痛なる苦悶を抒べたる所謂
心理小説を歡迎し、その取材は日にく、人生の暗黒面に向かつ

參照(三) 卷二、三、ボチ
 同、三、三葉亭の
 文章
 參照(四) 卷四、〇、武藏野
 參照(五) 卷一、二、文章の
 道
 卷四、三、王政復
 古
 參照(六) 卷四、五、長柄堤
 の訣別
 參照(七) 卷五、四、ウエス
 ヲダス
 卷七、六、高瀬舟
 參照(八) 卷六、〇、緋絨の
 よろひ
 蒼虬
 成田氏
 俳人
 天保十三年(三〇
 二)歿
 年八十三
 梅室
 櫻井氏
 俳人
 嘉永元年(五二)
 歿
 年八十

て進み去らんとせり。
 この時に方りて、東洋の一小島國は日清・日露の大役を経て、俄然
 として、一等國の伴に伍せり。國民の自覺と共に歐洲文學の思
 潮は盛に輸入せられ、現實を凝視し人生の眞を寫すを以て文學
 の主要なる職分なりとするに至れり。この播種者は二葉亭四
 迷なるが、自然主義の勇將として此の時代に活躍したるは國木
 田獨歩、島崎藤村、田山花袋等なりき。而して一面、坪内逍遙は英
 文學を紹介し、森鷗外は獨文學を翻譯するのみならず、小説・戯曲
 の創作に努めて、その長老たる名譽を辱しめざりき。

第二 和歌

歌道には桂園の流を汲む者多く、俳道には蒼虬梅室の門派のみ
 獨り盛にして、和歌俳句といへば、専ら活社會と交渉なき閑人・隱

蒼虬
 成田氏
 俳人
 天保十三年(三〇
 二)歿
 年八十三
 梅室
 櫻井氏
 俳人
 嘉永元年(五二)
 歿
 年八十
 落合直文
 明治三十六年(二
 五)歿
 年四十三
 伊藤左千夫
 大正二年歿
 年五十
 參照(九) 卷三、九、葵
 參照(一〇) 卷一、四、比叡の
 鳥
 卷五、〇、法隆
 寺

者之間に行はれしもの、明治初年の大勢なりき。かの國粹保存
 の論、國文學の研究等盛なりし時に至りて、落合直文等とその門
 下生との手によりて、歌道はまづ青年社會に入り來りぬ。かく
 て偏に風雅を生命とせる月花の天地を小なりとして、活社會の
 人生を歌はんとする傾向を生ぜり。

次いで正岡子規は俳句革新の餘力を以て短歌革新の叫をあげ、
 萬葉集を揚げて古今集以下を斥け、客觀寫生を入門として實生
 活の印象を詠み出づべしと唱へたり。その主張は伊藤左千夫
 等によりて繼承せられ、以て大正歌壇の一勢力をなすに至れり。

第三 俳句

俳諧には正岡子規出づるあり、天保の月並的俗調を排して天明
 の蕪村調を高唱し、新聞日本に據りて天下に呼號せり。子規は

河東碧梧桐
名は秉五郎
伊豫松山生
昭和十年歿
年六十四

外山博士
名は正一
東京帝國大學文
科大學長
文部大臣
文學博士
明治三十年(五
七)卒

參照(一)
卷六、七 勞働
天地有情
土井晚翠の詩集
明治三十二年に
出づ

參照(二)
卷五、七 鷺

從來の傳統を破り、専ら独自の見解を以て蕪村芭蕉等を研究批判し、進みて眞實の描寫を鼓吹せるのみならず寫生文の流行をも促しぬ。門下に高濱虚子、河東碧梧桐等あり。

第四 新體詩

この他、明治の新文藝としては別に新體詩あり。當初は明治十五年ごろ外山正一等が試みたる新體詩抄の調なりしが、その詞藻の稍乾燥なるに嫌焉たる者は、中古語を以て西歐の詩趣を傳へんとするあり、或は漢語を用ひて五七の單調を破らんとするもあり。三十年に至り、島崎藤村、土井晚翠二人嶄然として頭角を見し、藤村詩集は溫雅優美の調を以て、天地有情は縱横跌宕の風を以て、最も青年の間に喜ばれたり。

第五 散文

福澤雪池
福澤諭吉
參照(一三)
卷三、〇 古錢配
分の記
福地櫻痴
名は源一郎
新聞記者
明治三十九年(二
五)歿
年六十六
成島柳北
名は弘
新聞記者
明治十七年(五
四)歿
年四十八
參照(一四)
卷三、一五 日蓮上人
卷六、一八 平家の最後
卷八、一六 世界の四聖
參照(一五)
卷四、三五 大死一番

更に純文藝の範圍を出でて専ら一代の文章の模範となりしものを求むるに、かの漢文直譯風の文章が流行したりし日に於ても、既に福澤雪池、福地櫻痴、成島柳北等の平易明快なる文字あり。降つては、三宅雪嶺、坪内逍遙、森鷗外、高山樗牛、大町桂月、徳富蘇峯、同健次郎、相馬御風等あり。その文各、特色あり、長短ありと雖も、皆縱横自在にしてよくその言はんとする所を言へり。

明治維新の當時は舊物破壊の氣勢甚だ猛に、江戸時代の平易なる通用文體を一變し、佶偈なる漢文直譯體の文を以て普通文と定め、法令制度より論說記事悉くこれによることとなり、隨つて文藝小説も亦多くこの文體を用ひたり。されどかゝる不自然なる文體は永く勢力を有すべきにあらず。明治二十年ごろ山田美妙、齋二葉亭、四迷二人相前後して言文一致體の小説をもの

參照(六)
卷一、六 九十九
里濱
卷二、三 利根川
の秋曉

參照(七)
朝
卷一、二 田家の
朝
卷三、八 惜春
卷五、四 縮むも
のの力
卷九、四 大人と
子供
卷十、四 古事記
を讀みて

山田美妙齋
名は武太郎
小説家
明治四十三年(三
五)歿
年四十三
參照(八)
卷一、三 故郷
卷四、四 箱根路

したる當初に於てこそ是非の論世上に喧しかりしか、三十二年
正岡子規が寫生文を提唱せるころより次第に文壇の勢力とな
り、次いで自然主義作家の輩出して現實描寫をつとむるに至り、
自ら口語體は一般文學を風靡するに至れり。
明治の社會が日本に於ける空前の變化なると同じく、明治の文
學も亦從來に見るべからざる一大變化をなしたるなり。約言
すれば明治以前の文學は概して理想的、技巧的、典據的なるに對
し、明治の文學は少くとも現實的、自然的、慣習打破的に進まんと
する傾向を有せるものと謂ふべし。(佐々醒雪の文を參酌す)

六 大正時代の文學

第一 小説

徳田秋聲
名は末雄
小説家
明治四年(五三)
石川縣生
正宗白鳥
名は忠夫
小説家
明治十三年(二五)
岡山縣生
參照(一)
卷二、七 文鳥
卷九、二 草枕

大正時代の文學は、自然主義文學の衰潮に乗じてその曙光を發
し來りぬ。而も、明治の末期に至るまで田山花袋、島崎藤村、徳田
秋聲、正宗白鳥等の作家は、各、特色ある製作を出して、自然主義は、
依然として文壇の主流をなせる觀ありき。この間に立ちて、唯
一人滔々たる大勢の外に超越し、最後まで自己の個性を護り、異
彩ある作品を多く出したる者を夏目漱石とす。吾人はこゝに
大正當初の文壇の一重鎮として、漱石の名を特筆せざるべから
ず。漱石の才能は多面多様にして、内容によりて様式を變化し
行き、特にその初期と晩年とは作風を異にしたるために、容易に
一の主義を以てこれを掩ふこと能はず。たゞその如何なる傾
向を擇ぶにもせよ、悉く自然主義と立場を異にし、或は全く之と
正反對に出でたり。自然派が頻に自己の作品の人生第一義に

觸れたりと稱するや、彼は謂へらく、その第一義とは生死海中に在りての第一義なり。若し生死の關門を打破して生死を眼中に置かざる人生觀を立し得とせば、彼等の所謂第一義は却つて第二義に墮するに非ずや」と。評者或は漱石の態度を目して禪的といひ、俳諧的と稱し、低回趣味と名づく。蓋し、その最も優れたる傾向は、英國派心理小説の脈絡を引ける作品にあるべし。ともあれ、その明色と倫理的意識と東洋趣味的の沖澹とは、相俟つて自然主義の暗色より救はれんと欲する讀者に多大なる慰安を與ふる力の籠れるは争ふべからず。

曩に歐米文學の翻譯紹介をなして文壇を啓發せる森鷗外は卓然たる識見を持して歴史小説を創作し、老熟の筆致、よく彼の該博なる學殖と毅然たる人格とを示せり。この他に耽美派と稱

武者小路實篤

思想家

文學者

明治十年(三三七)

東京生

トルストイ

ロシアの小説家

思想家

(西曆一八六一—一九〇)

ドストエフスキ

ロシアの小説家

劇作家

(西曆一八三—一八六)

タゴール

印度の詩人

(西曆一八六一—)

ロマンローラン

佛國の小説家

戯曲家

(西曆一八六一—)

せらるゝもの、前に永井荷風あり、後に谷崎潤一郎あり。その官能描寫の藝術的色彩と芳香とは、能く人心を惹くものあり。當時、正面より自然主義に對抗して、來るべき時代精神の一面を暗示したるは武者小路實篤を始とし、いづれも白樺派の人々なり。白樺派は人道愛と個人的生命の光明とを高調する新理想主義の一團なり。その人生に對する態度は、畢竟肯定的にして、人類の將來は内部生命の飛躍によりて、無限の幸福に向かひ得べしといふが其の信條とする所なり。思ふに明治末期より大正初期にかけて、著しき興味を以て我が思想界に歓迎せられたるは、露國のトルストイ及びドストエフスキの論文、作品にして、更に印度のタゴール、佛のロマン、ローラン、英のカーペンター等の思潮雜然として流れ入り、尙之に加ふるに獨のオイケン、佛

カーペンター
英國の思想家
(西曆一八四一)
オイケン
ドイツの哲學者
(西曆一八六一—一八
七〇)
ベルグソン
佛國の哲學者
(西曆一八五九—)

のベルグソンの新哲學を以てせり。蓋し白樺一派の藝術思想はこれら文學及び哲學の感化によること最も多し。これらの思潮は飽くまで人間心靈の勝利を基調とし、創造的進化の新生活を謳歌することに於て到底人生の些事或は機械的なる運命觀にのみ停滯せる自然主義と相容るゝものにはあらざりき。かく新理想主義の一方に崛起すると同時に、自然主義に取つて代りし純藝術派の諸新人は、皆現實主義の信徒たりき。現實主義といひ、寫實主義といひ、同じくりヤリズムの名に於て呼ばれるれども、二者は元來その趣を異にせり。寫實主義は始より主觀をまじへず、専ら外面より事象を描かんとするものなれども、現實主義は、觀照に於ては科學的精確を尊ぶに拘らず、批判と省察とは飽くまでも嚴肅なる主觀に於てせんとするものなり。而

参照(二)
卷一、三 青の洞門
志賀直哉
明治十六年(一五
三)宮城縣生
里見弴
本名山内英夫
明治二十一年(一
五〇)横濱生
参照(三)
卷一、七 槍岳へ
卷三、五 戲作三
昧

して我が國現代の作家は、深淺の差こそあれ、多くはこの主義に據るものの如し。曩に或は自然主義派に屬し、或は新理想主義派に數へられ、或は漱石の流を汲めるものにして、今日この現實主義に入るべきものもあり。菊池寛、芥川龍之介は冷靜なる理智によりて人間心理と人生の現實相との矛盾を諷刺し、或は之に新解釋を與へんとし、志賀直哉、里見弴等は精練せる筆致を以て如實の自然を渾然たる藝術として創造するにつとめたり。

第二 戲曲

詩歌・小説に比して劇文學の後れがちなるは何れの國に於ても然り。これ蓋し演劇は多數觀客を相手とするより演出上容易に根本的革新を許さざるが故なり。日清役後、坪内逍遙は史劇の新作を試み、森鷗外は西歐諸國の新劇を紹介したれども、これ

小山内薫
劇作家
廣島縣生
昭和三年歿
年四十八

参照(四)
卷六、10 緋絨の
よろひ

を實演することは至つて少かりき。明治末期に於ける坪内逍遙の文藝協會、小山内薫等の自由劇場、その他演劇に關する實際的啓蒙運動の起りしより、近年劇に對する興味は漸く文壇の中心をなし、戯曲の創作を試むるもの次第に増加せり。

第三 詩歌

短歌長詩の壇上には幾多の新人の輩出するあり。明治時代に於て、落合直文、正岡子規等が革新の鋤鋤を加へたる短歌の野は、大正の今日に至りて、いよ／＼百花繚亂の盛況を呈せり。即ち幾多の短歌雜誌は刊行せられ、よく個性を歌ひ、實生活を詠じ、その用語に、取材に、各特色ある歌風を示せり。中にも與謝野寛夫妻の「明星」の復活と齋藤茂吉、島木赤彦等の「アラ、ギ」派の流行とは最も注目に値すべし。

参照(五)
卷五、九 斑鳩の
宮
参照(六)
卷一、六 新月

参照(七)
卷一、10 童謡四
篇

長詩壇も三木露風、北原白秋等の専門作家の外に他の藝術家の之を試むるものもありて亦甚だ賑へりと謂ふべし。たゞ未だ眞の國民詩として誦すべきものなきに似たれど、その詩境著しく向上し、清新にして光明に富み、諷誦するに足るもの尠しとせず。又、童話文學と共に、新童謡の勃興せるは、兒童の世界の爲にも喜ぶべく、この點に於て北原白秋、葛原鹵等最も力を致せり。俳壇には曾て高濱虚子等が正岡子規の築きたりし「ホト、ギス」の古壘を守るあり。外に「海紅」に據れる河東碧梧桐、層雲に據れる萩原井泉水等の一派は、全く從來の季題趣味を脱し、自由に觀照の世界の一閃を捕へて之を印象的に吟じ出すを以て、同好者の共鳴する所たり。

第四 歐米文學の翻譯

歐米文學の翻譯の盛行せるはまた當代藝術界一般の要求を示せるものなり。我が印刷術の進歩は、世界如何なる國の文學をも自由に移植せしめ、我が國民をして坐らにして世界藝術博物館の廻廊に立つ思あらしむ。大正の初頭厨川白村「近代文學十講」を著し、西歐文學の諸流派を啓蒙的に説述するや、忽ち數十版を重ねたる事實に見るも、當時我が讀書界が、いかに新欲望に驅られたるかを知るべし。（千葉龜雄の文を參酌す）

現代の文學

第一 小説

自然主義の作家田山花袋は昭和五年病歿したれど、島崎藤村・徳田秋聲はなほ創作の筆を輟めず、正宗白鳥は評論に氣を吐けり。

谷崎潤一郎 明治十九年（五四）
 〇東京生
 武者小路實篤 明治十八年（五四）
 〇東京生
 佐藤春夫 明治二十五年（三〇）
 〇愛媛縣生
 吉田絃二郎 本名は源次郎 明治十九年（五四）
 〇佐賀縣生
 參照（一）
 卷一、三 青の洞門
 久米正雄 明治二十五年（三〇）
 〇長野縣生
 室生犀星 本名は照道 明治二十二年（二七）
 〇金澤生
 三上於菟吉 明治二十四年（二九）
 〇埼玉縣生
 中村武羅夫 明治十九年（五四）
 〇北海道生

大正時代に名を成し、今尙その活動を續くるものに、谷崎潤一郎・武者小路實篤・里見淳志・賀直哉・佐藤春夫・吉田絃二郎・菊池寛・久米正雄・室生犀星等あり。就中、説話の構想に巧みにして官能描寫に勝れたるは潤一郎にして、人類の幸福を強調して人道主義に徹せるは實篤、まごころの徹底せると精彩の筆致に富めるとは淳直哉等なり。

この外、通俗小説を以て名を成せるものに三上於菟吉・中村武羅夫・加藤武雄・吉屋信子等あり。近時頓に勢力を得たる所謂大衆文學の作家は中里介山・直木三十五・大佛次郎・白井喬二・吉川英治等其の他なほ多し。

大正の末年より興りて一時文壇を賑はしたる新感覺派は尾大振はず、又、大正の中葉より徐々に擡頭し來り、一時は新感覺派を

加藏武雄

明治二十一年(三
五)神奈川縣生

吉屋信子

明治二十九年(二
五)新潟縣生

中里介山

本名は彌之助
明治十四年(三五
一)東京府生

直木三十五

本名は植村宗一
大阪生

大佛次郎

昭和十年歿
年四十二

白井喬二

本名は井上義道
明治二十一年(二
五)横濱生

吉川英治

明治二十五年(三
五)横濱生

凌ぎたる、所謂無産派の作家も、この期半ばにして没落せり。

昭和六年九月、滿洲事變勃發以來、國體明徴、國民精神作興等の運動によりて、國民の志操、感情漸次に歸し、共同的國民自覺に目ざめつゝあるも、未だ作品の上にその特色を顯現するに至らず。要するに明治、大正に興りし自然主義、現實主義、理想主義等の如き主義色彩は漸く稀薄なるを致し、文壇は今や純文藝の孤城を守る者少く、作家は通俗小説若しくは大衆文藝に分れたるもの如きも、最近に至りて既成作家、新興作家共に稍、活氣を呈するに至れり。

又、昭和二年の頃より、印刷機能の發達せるを利用して前代及び當代の文學或は世界各國文學の翻譯を結集して大量に出版するもの多く、所謂圓本なる叢書の流行を招來せり。これが爲讀

者層の擴大せられ、廣く一般に流通するに至れるは前古未曾有の事に屬す。

第二 戯曲

「戯曲時代來ると謳はれしこと一再に止まらざれど今尙依然として振はざるは戯曲なり。但、小山内薫等築地小劇場に據りて盛に外國作品の演出紹介に努めしが、やがて新作をも上演するに當り、一時頓に活氣を呈したり。昭和三年薫の歿するや、新劇は頓挫を來し、舊劇獨りその勢力を振ふものの如し。作家としては中村吉藏、山本有三、岡本綺堂、眞山青果、岸田國士等あり。童話劇の作者には久保田万太郎あり。

此の間にありて坪内逍遙が二十年の努力をつゞけて沙翁作品全部の翻譯を完成せることはその勞作感謝せざるべからず。

中村吉藏

文學博士
明治十年(三五七)
鳥根縣生

山本有三

本名は勇造
明治二十年(三五
七)栃木縣生

參照(二)

卷四、四 西郷と
大久保

岡本綺堂

本名は敬二
帝國藝術院會員
明治五年(三五三)
東京生

參照(三)

卷五、七 夜叉王
眞山青果

眞山青果

本名は彬
明治十一年(三五
三)仙臺生

岸田國士
明治二十三年(二
五)東京生
久保田万太郎
明治二十二年(二
五)東京生

參照(四) 卷六、三 民謡 卷十、三 歌の調子

平福百穂

本名は貞藏

日本畫家

秋田縣生

昭和八年歿

年五十七

中村憲吉

歌人

廣島縣生

昭和九年歿

年四十六

土屋文明

歌人

明治二十四年(二)

至)群馬縣生

太田水穂

本名は貞一

歌人

明治九年(三五)

長野縣生

參照(五)

卷三、一六 富士の

尙戲曲の新しき表現形式として映畫及びラヂオ放送あり。映畫は有聲映畫及び天然色映畫により、ラヂオは更にテレビジョンによりて、演劇の表現し得ざる種々の領域を獲得せり。従つて戲曲の發展も亦この方面に益期待をかけらるゝに至れり。

第三 詩歌

明治時代に一大革新の行はれたる和歌は、依然としてその進歩を續く。子規の系統を引ける「アララギ」派は近く島木赤彦・平福百穂・中村憲吉を失ひしが、尙齋藤茂吉・土屋文明等ありて、精進怠らず。「心の花」の佐佐木不信綱・潮音の太田水穂なほ一方の雄なり。嘗て明星に據りて天下を風靡せし與謝野寛近く逝き、その妻晶子の作に清新味の稍少きは惜しむべし。この外に尾上柴舟・北原白秋・窪田空穂等あり。又傳統の句高き和歌の世界にも口語

靈

參照(六)

卷四、六 雁

富田碎花

本名は戒次郎

明治三十三年(二)

至)岩手縣生

河井醉茗

本名は又平

帝國藝術院會員

明治七年(三四)

大阪府生

參照(七)

卷一、一〇 童謡四

首

百田宗治

明治二十二年(二)

至)大阪市生

參照(八)

卷三、一六 タぐれの時

參照(九)

卷一、一〇 童謡四

首

參照(一〇)

卷一、一〇 童謡四

首

歌を唱ふる聲漸く聞ゆるに至れり。

俳句も亦子規の系統をひける「ホト、ギス派」なほ盛なり。高濱虚子は之を主宰す。河東碧梧桐近く逝き、明治以來新俳句の運動を繼續せるものは萩原井泉水のみとなれり。詩の運動は盛大なりし大正時代を承けてやゝ寂寥を覺ゆ。作家には野口米次郎・千家元麿・富田碎花・河井醉茗・百田宗治・室生犀星等あり。譯詩は堀口大學の名最もきこゆ。尙歌謡の流行著しく、北原白秋・西條八十・野口雨情等の作頗る多し。童謡には白秋・八十・雨情と共に葛原鹵・河井醉茗等の多年啓導の功没すべからざるものあり。

第四 隨筆

隨筆の作品は頗る多きに上るも、吉村冬彦・大河内正敏・阿部次郎

參照(二)
卷五、四地圖を眺めて
大河内正敏
工學博士
子爵
帝國學士院會員
明治十一年(五)
〇東京生
參照(三)
卷二、九雜草

等の如き學者が研究の餘技として試みたるものに佳作あり。科學の世界より呼びかけたるこれら諸氏の作品には自ら一種の氣品あり、含蓄あり、新鮮にして多角的なる觀念を吾人に提供す。

師範國文 第一部用 卷十 終

新版師範國文第一部用卷十

昭和十二年十一月十五日 印刷
昭和十二年十一月十八日 發行
昭和十三年三月十日 修正再版印刷
昭和十三年三月十三日 修正再版發行

定價
卷二、三、四、五、六、八 金六十錢
卷七 金五十七錢
卷九、十 金五十五錢



編者 吉田 彌平
補訂者 石井 庄司
發行者 東京市神田區神保町一丁目五番地 上原 才一郎
發行所 東京市神田區神保町一丁目五番地 光風館書店
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 大日本印刷株式會社 根本 力三

本館發行 of 教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接に御注文被下候はば直に御送本可致候

